

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 173, 2016

## VIEW 展望

短編映画の世界～「すかがわ国際短編映画祭」を通して～／戸田桂…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3 総務委員会…3

支部・研究会だより 関西支部…4 中部支部…5 ショートフィルム研究会…6-8  
西部支部…9 東部支部…9 ヴィデオアート研究会…10 ドキュメンタリードラマ  
研究会…10-11 アナログメディア研究会…11-12 クロスメディア研究会…12-15  
映像テキスト分析研究会…16 映像表現研究会…16-17

日本映像学会第42回大会第2通信…21

## CONFERENCE 日本映像学会第41回大会報告【2】

### 【研究発表】

成田雄太／日本における無声映画期のプログラム—その映画史研究的意義について…18

高橋橋克三／記憶と記録の狭間にて

——3年目に入った東京北区「映画アーカイブによる街おこし」…18

植田 寛／高等教育における映像専門教育の指導方法の考察…19

板倉史明・松尾好洋／1930年代におけるアマチュア映画文化と色彩

——コダカラーの研究活用とアーカイビング…19

井川重乃／加藤泰『みな殺しの霊歌』論

——大和屋笠と斎藤龍風の論争を手がかりとして…20

### 【作品発表】

大島慶太郎／『POP 70』——白黒ハイコントラストフィルムによる映画制作…20

## FROM THE EDITORS

編集後記…21

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第173号」2016年1月1日発行

発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：相内啓司（委員長）・鳥山正晴（副委員長）・

伊藤高志・石坂健治・遠藤賢治・橋本英治

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# 短編映画の世界

## ～「すかがわ国際短編映画祭」を通して～

戸田 桂

短編映画は、幅広いジャンルの映像が作られている、とても奥の深い世界だと改めて実感しています。福島県須賀川市で開催される「すかがわ国際短編映画祭」は、“世界一小さな映画祭”を自称して、1989年にスタートし、次回で28回目を迎えます。私は数年前から、この映画祭の実行委員を務めています。現在、日本国内で短編を上映する映画祭は「すかがわ国際短編映画祭」だけではありませんが、この映画祭の特徴は、ジャンルの上でのポリシーは設けず、国内外から選んだ様々な短編映画を一般の方々に観てもらおうことを目指している点です。上映する作品の条件は、60分以内であることだけです。ですから、30本程の上映作品は、時間も1分の作品から60分のもので、内容もアート志向の強い作品、おしゃれなショートショートから顕微鏡微速度撮影を駆使した科学映画、伝統工芸技術の記録映画、骨太なドキュメンタリー、教材映像など、バリエーションに富んでいます。私は、“あえて雑多であること”がこの映画祭の魅力だと思っています。

須賀川市に「すかがわ国際短編映画祭」が誕生したのは、同市出身の記録映画カメラマンである故・金山富男氏の発案からでした。『柿右衛門ーにごしでー』（1978）、『伊勢紙型』（1977）などの記録映画の撮影を手がけている金山氏の呼びかけで、岩波映画製作所の小口禎三会長や長く文化映画を演出し、「文化映画時代 十字屋映画部の人びと」の著書もある岡本昌雄氏、映像文化製作者連盟事務局長山本克己氏、ユニ通信社社長遠藤克氏（いずれも故人）を始め、日本映画作家協会、日本映画テレビ技術協会、映像文化製作者連盟などが協力し、海外作品も選定して映画祭が開催されました。

短編映画はフィクション、ノンフィクションという分類とは別に、内容や製作の目的によって様々な名称でくられ、それぞれのジャンルで選奨や映画祭等が行われていますが、映画館で商業的な公開はされない作品が中心ですから、一般の人々は情報も少なく、観るチャンスもあまりありません。恥ずかしいことに、私も日本の短編映画史に名を残す作品を、数多く見逃しています。最近では映像を視聴するツールが多様化し、インターネットを通じて公開される作品も増えました。先日、乗った飛行機の中では、ファッションブランドのフェラガモが作った短編映画『ホワイト・シュー』を観ましたし、新たな鑑賞環境は徐々に広がりつつあるようです。しかし、科学映画や文化記録映画などを含めた、いろいろな短編映画を観るチャンスは依然として多くはないでしょう。

「第28回すかがわ国際短編映画祭」は、5月14～15日に須賀川市市民文化センターで開催されます。従来は大小の2ホールを使

い、小ホールでは子供向けプログラムを組んできました。現在は東日本大震災で全壊した須賀川市役所の一部が移転中で小ホールが使用できず、大ホールのみで上映を行っていますが、子供たちにも、ステキな短編映画と出会って欲しいと思っています。近年、個人的に“ユース映画”というジャンルやユースへの映像教育に関心を持っています。映像教育という言葉は、いろいろな使われ方がありますが、私がイメージするのは「映像表現を観て感じ、理解し、楽しむ教育」といったところでしょうか。いろいろなジャンルの作品を楽しむ次世代の観客を育てることが、これからの多様な映像作品の存在を支えると考えるので、子供には、お子様向け過ぎるものでも、道徳的感想を求めるものでもなく、映像表現を楽しめる様々な作品に触れて欲しいと思います。そこで、昨年はベルリン国際映画祭でジェネレーション部門の短編を観てきました。その中から、年の離れたお兄ちゃんのことが大好きな女の子のジェラシーが可愛い『アグネス』（スウェーデン）、北アイルランド紛争が影を落とす70年代末の北アイルランド・ベルファストに暮らす元気のいい兄弟の話『ブーガルーとグラハム』（イギリス）、小熊秀雄のシュールな童話『焼かれた魚』の舞台をイランに置き換えたアニメーション『焼かれた魚』（イラン）の3本を選び、今年5月の「すかがわ国際短編映画祭」で紹介したいと思います。

その他、カナダやアメリカのアニメーション、実写にアニメーションを組合せ、瑞々しい少女の気持ちを表現した『私の名はエラザ』（チェチェン）、科学映画『Sex Change オキナワベニハゼの社会と性転換』、文化庁の企画で、人間国宝のわざを克明に捉える伝統工芸記録映画『瀬戸黒ー加藤幸造のわざ』、『芭蕉布ー平良敏子のわざ』（映画祭の生みの親と言える金山氏が撮影を担当した、1981年の作品『芭蕉布を織る女たちー連帯の手わざ』も上映）など、今年も幅広いジャンルから作品を選んでいきます。記録映画ではフィルムでの製作はほとんどなくなったと言って良い状況ですが、伝統工芸記録映画は現在もフィルムで撮影しており、映画祭ではフィルムをお借りして上映します。ぜひ、須賀川へ短編映画の世界に浸りにいらっしゃいませんか？様々なジャンルの映画関係者、観客が出会う場としても、成長させていきたいと思っています。

第28回すかがわ国際短編映画祭

開催：2016年5月14～15日

会場：須賀川市文化センター（福島県須賀川市牛袋町11）

<http://sisff.littlestar.jp/>

（とどかつら／映画研究家）

# 研究企画委員会

委員長 齊藤 綾子

## 報告と計画について

研究企画委員会では、第三回研究企画委員会を以下のように開催しました。

日時：2015年12月19日(土)13時30分~14時30分  
場所：早稲田大学戸山キャンパス39号館  
出席：奥野邦利、太田曜、大橋勝、草原真知子、瀧健太郎

以下の各項目について話し合わせ、承認となりました。

### 1) 研究会登録申請の審査(1件)

・映像教育研究会(代表:木下千花会員)を研究企画委員会として承認し、理事会へ内申。

### 2) 研究会登録申請(締切4月末)／研究活動費助成申請(締切3月末)の内容確認

- a: 研究会登録申請については、前回(秋期)募集において、特段問題が生じなかったことを確認し、変更なく進める。  
b: 研究会活動費助成の公募については、応募状況により予算額の調整を行なう必要を勘案し、[予算額A: ¥150,000以内(2件程度)／予算額B: ¥80,000以内(3件程度)]といずれも以内と表記を変更した。  
また、予算額Aについては上映会場費や作品賃借料などを含むものと明確にした。  
c: いずれの募集も1月前半より日本映像学会ホームページ及びメンバーリストにて情報発信する。

### 3) 活動報告／活動費のチェック体制について

- a: 研究会活動の報告については、会報への掲載及び大会での発表のほか、新たに準備が進められている学会HPの活用を推進する。  
b: 研究会活動費助成を受ける場合、申請の際には予算書、決算(年度末)の際には領収書の原本とともに使用明細書の提出を義務付ける。  
なお、予算書及び使用明細書は学会仕様を使用すること。  
c: 研究会活動費助成を受けた場合、決算報告を総務へ提出し、理事会にて審査を行う。

### 4) HPの活用を含めた、会員の発表機会について

- a: 会報に掲載された研究会活動報告を、各研究会のページに累積できるようなHPの活用を理事会に提案する。  
b: 総務委員会や機関誌編集委員会と協働して、映像産業や映像技術の最新情報、各国の映画祭レポートや教育実践など、会員間の情報共有を促す方法を検討する。

以上

(さいとう あやこ／研究企画委員長、明治学院大学文学部)

# 総務委員会

委員長 相内 啓司

## 委員会報告と計画について

第5回総務委員会を以下のように開催しました。

日時：2015年12月19日(土)13時30分~14時30分  
場所：早稲田大学戸山キャンパス39号館  
出席：相内啓司、鳥山正晴、石坂健治、遠藤賢治  
※オブザーバー出席 武田潔、加藤哲弘

議案と討議された内容は以下のとおり。

### 1) 会計報告と来年度に向けての方針:

- a: 2015年度9月~11月度収支決算報告書の確認。  
b: 来年度の方針を、次期改選される2016年度総務委員会にゆだねる。  
c: 会計検査について: 会計検査を引き続き公正に行なうための公認会計士への業務委嘱について、書面をもって正式に契約を行なうことが確認された。  
d: 年会費について: 学会の円滑な運営を行なうための財政的な基盤は主に会員が納入する年会費に負っている。しかしながら、ここ数年間で幾度も一時的な財政危機に陥ってきたという経緯がある。そのため今期もこの時期に、年会費未納者の確認がなされ、あらためて納入のお願いをすることが決められた。なお、4年間以上滞納の場合は退会勧告を通知することが確認された。(2015年12月19日現在で、過年度未納金の総額はおよそ¥2,950,000に及ぶ) 会員諸氏のご理解と協力が必要。

### 2) 第22期役員選挙について: 2016年5月29日に開催予定の第43回通常総会に向け、任期満了する現第21期役員に代わる次期第22期役員選挙が行なわれる。については第22期役員選挙管理委員会が発足する運びとなった。(以下委員: 相内啓司、鳥山正晴、末永航、奥野邦利、上倉泉、石渡さくら、芦谷耕平、野村建太)

- 支部別役員定員(理事)は2015年12月現在のところ次のとおり。  
東部支部: 12名、中部支部: 2名、関西支部: 6名、西部支部: 2名  
なお、選挙は2016年4月1日現在の正会員により、2016年5月6日(金)選挙管理委員会宛投票到着分とする。  
\*詳細については2016年4月中旬に郵送にて各会員へ通知する。

### 3) 第42回大会について: 詳細は本会報21頁を参照。

### 4) 学会HPリニューアルについて: より使いやすさを検討し、HPの構成の改善に取り組んできた。パソコン対応中心のサイトをスマートフォンでも見やすくする改善も完了した。各支部・研究会からの情報提供を各支部・研究会の判断で独自に行なえるように改善するべく、テスト運用を行なっている。現在、情報提供に関するガイドラインを検討中。

以上

(あいうち けいじ／京都精華大学芸術学部)

## 支部・研究会だより 関西支部

中村 聡史

関西支部では昨年(2015年)11月末に神戸芸術工科大学の橋本英治会員のお世話により、下記のとおり関西支部第76回研究会を開催いたしました。

日時：平成27年11月28日(土)午後2時より

会場：谷岡学園 梅田サテライトオフィス『CURIO-CITY(キュリオシティ)』(グランフロント大阪タワーA(南)16階)

研究発表1：日本における1970年代後半の自主上映：オルタナティブな映像表現

発表者：田中晋平会員(大阪芸術大学芸術学部)

発表概要 記：田中晋平

本発表では、1970年代後半に東京や全国各地で多様な展開をみせた、非商業的な自主上映活動の意義を検討した。先行研究では、戦後の自主製作・自主上映の歴史のなかで、60/70年代以降にかつての政治主義的な上映運動と異なる、映画ファン、シネフィルによる活動が隆盛し、後のミニシアター・ブームなどに繋がったとする見方が一般化している。こうした理解に対し、発表者が当該期に注目する狙いは、当時の「個人」という立場を強調する自主上映が担ったオルタナティブな活動の実態を探り、商業性・非商業性という区分自体をも脱構築するその試みを捉え返すことにある。

議論の流れとして、まず60年代の草月シネマテークやATGの活動、小川プロなどのドキュメンタリーの上映会とともに、特に68年の鈴木清順問題共闘会議におけるシネクラブの問題提起を再考し、以降の自主上映に繋がる論点を導いた。そのなかで問われた政治運動と芸術や文化との関係は、単に70年代に消失したわけではなく、以降の自主上映の取り組みにも様々なかたちで受け継がれている。次に情報誌の発達と自主製作・自主上映の結びつきに触れたうえで、当時のパーソナリゼーションが進む映画の文化的パラダイムにおいて、上映活動が果たした役割を検討した。具体的には、70年代後半に現れる欧日協会やシネマテーク・ジャポネーズの活動に即して、未知なる映画との遭遇を求めた、当時の自主上映の新たな展開を考察していった。「自分たちの観たい映画を輸入・配給し、自らの手で上映する」という理念を掲げた後者の活動は、全国のグループでポーランド映画をはじめとした作品の共同配給・共同所有のためのネットワークを形成する。

こうした活動の多くは、組織的なものではなく、無数の個人という立場の繋がりのなかで進められたが、単なる映画ファンの活動に還元されるわけではない。いわば当時の「個人映画」の逸脱的な試みと同様、商業的な映画の配給や興行の在り方、さらにはそれまでの非商業的な上映運動の問題点自体を問直す、オルタナティブな〈場〉を構築した活動として位置づけられる。各地域で観られる映画の多様性を確保したその役割は、80年代以降のミニシアターや映画祭などの隆盛によって変容を迫られるが、現在のわれわれを取り囲む映像視聴環境を、観客の立場から捉え返す上で、有益な視座を提供してくれている。

研究発表2：『ヴィトリヌ』のヴァリエーションとその映像的視覚効果

発表者：北市記子会員(大阪経済大学人間科学部)

発表概要 記：北市記子

メディアアートの先駆者・山口勝弘は、戦後の前衛芸術そのものを体現する希有な存在である。その70年近くに及ぶキャリアの中で、時に様々なスタイルを変化させながら表現活動を展開してきたが、今もなお彼がこだわり続けているのが、初期の代表作『ヴィトリヌ』である。

『ヴィトリヌ』は、作品と鑑賞者との関係性によって動的なイメージが立ち現れる、環境的な広がりを持った造形作品のシリーズである。1951年末～1958年までの約7年間に数十点の作品が制作されたが(正

確な作品数は不明)、あまりの数の多さから山口自身もその全容を把握しきれていないのが実状である。

そこで、山口勝弘の原点とも言うべき『ヴィトリヌ』シリーズについて、独自に入手したオフィシャルな作品データと図録等のパブリックな資料を照合しながら、改めて詳細な調査を行うこととした。系統立てて分析を行うことで、山口が作品を通して提示しようとした理念や思考をつまびらかにすることができるのではないかと考えたからである。

具体的には、これらの作品群を可能な限りリスト化して「可視化」し、改めてその構造や表現上の特徴を比較・分析することを試みた。その結果、現時点で推定可能な『ヴィトリヌ』の作品総数は79点となった。制作年ごとの作品数には相当のばらつきがあり、またサイズや形状も様々である。今回はこれらのヴァリエーションの中から、特に1955年に制作された11作品に注目し、さらに詳細な分析を行っていった。

そうして浮かび上がってきたのが、この時期の『ヴィトリヌ』に特徴的な円の多用である。初期の『ヴィトリヌ』には、P.モンドリアンの抽象絵画を連想させる矩形のパターンが描かれており、全体として直線的な画面構成が特徴である。しかし1955年のいくつかの作品では、意図的に円形のモチーフが用いられ、形(直線/曲線)の違いによる見え方(イメージの変形効果)の差異を、作品を通して実験的に検証する試みがなされている。

『ヴィトリヌ』は絵画的なフォルムを持った造形作品であり、それ自体は直接的に動きを表現しない。しかし鑑賞者の能動的な働きかけによりイメージが変形されて、独特の映像的な視覚効果が生じるのである。『ヴィトリヌ』の様々なヴァリエーションは、こうした新しい視覚効果を探求するための習作的な要素を持っている。そこではキネティックアートやオブアート、インタラクティブアートとの関連性が見て取れるが、ガラスがはめ込まれた箱状の装置という外観からは、「イメージの標本箱」としてのテレビモニターの機能を連想することもできる。

山口勝弘は1970年頃からビデオメディアによる表現へと移行し、日本のメディアアートの先駆者として数十年にわたって活躍してきたが、その思考の根源は『ヴィトリヌ』において既に実践されていたと言えるのである。

※本研究はJSPS科研費26370190の助成を受けています。

※発表概要は各発表者に執筆いただいたものを掲載しております。

以上2件の研究発表について、それぞれ多様な視点から活発な質疑応答と意見交換が交わされ、有意義な研究会となりました。

研究会終了後、同会場にて平成27年度日本映像学会関西支部総会が行われました。議題として平成27年度事業報告、平成27年度会計報告、平成28年度事業計画案が上がり、総会にて了承されました。

最後に今後の予定を報告いたします。

来たる平成28年3月26日(土)に第77回研究会を京都精華大学で開催する予定です。また、5月中旬ごろに第78回研究会を花園大学で、11月下旬から12月中旬ごろに第79回研究会を大阪大学で開催することを予定しております。

平成28年度第38回夏期映画ゼミナールに関してはテーマを含め現在検討中ですが、例年どおり9月上旬に京都府京都文化博物館にて開催する予定です。テーマ、プログラム、シンポジウム等ゼミナールの内容については、決定次第お知らせいたします。

以上

(なかむら さとし/関西支部担当常任理事、関西学院大学)

Image Arts and Sciences 173 (2016) , 5

## 支部・研究会だより

# 中部支部

伏木 啓

&lt; 報告 &gt;

中部支部では、2015年度第2回研究会を下記の通り開催しました。

2015年度日本映像学会中部支部第2回研究会

日時：2015年12月5日（土）13:00より

会場：中部大学春日井キャンパス「不言実行館 ACTIVE PLAZA」1階

「アクティブホール」

所在地：〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

### ◎スケジュール

13:00～13:05：開催校挨拶

13:05～14:15：研究発表

- 林桃子会員

- 佐近田展康会員＋伏木啓会員

14:30～15:30：長門洋平氏によるご講演

15:30～16:40：ディスカッション

- ディスカッション：福田貴成氏（中部大学人文学部共通教育科教員）、  
尾鼻崇会員（中部大学人文学部教員）

17:30～：懇親会（会場：中部大学春日井キャンパス「不言実行館  
ACTIVE PLAZA」6階「アロハテーブル」）

### ◎研究発表

林桃子会員

タイトル：「リンケージを示すイメージリテラシー・ツール」

要旨：本研究は、電子ネットワーク社会におけるイメージの理解や発見をリンケージ（繋がり）を通して促すためのツールを開発することを目的としている。その基礎的な技術として、写真の形や色などの構成要素から類似検索することができるコンテンツベースド・イメージリトリバル（CBIR）を用いている。人が写真を見る際の注視行動を、写真への注視範囲に関する調査用紙とアイカメラを用いた被験者の注視点データ分析により測定した。そしてその分析結果を考慮に入れ、写真の類似検索を通して三種類のリンケージを表わす機能を持たせたイメージリテラシー・ツールを開発した。

佐近田展康会員＋伏木啓会員

タイトル：「映画における〈音〉の機能」ビデオクリップ集の制作を巡って

要旨：本研究は、科研費基盤研究(B)「映画における〈音〉の機能——その多角的分析と映像教育資源の開発」（課題番号25284045、2013～2015年度）の助成を受けて進行中の研究であり、映画における「音」（声・音楽・物音・音響操作すべてを含む）について、過去の理論研究と映画作品事例の検証を通じて、それが果たしている「機能」を多角的に分析するものである。最終的な研究成果として、分析された音の機能が顕著に分かるシーン事例を映像化し、同一映像に対する〈音〉機能の有無や

複数の解釈による音付けを比較対照できるオリジナルのビデオクリップ集を制作する。完成したビデオクリップ集は、理論的解説を付したうえで、インターネット上に無償公開することを企図している。

今回の発表においては、現時点における〈音〉の機能の分析枠組みを提示したうえで、ビデオクリップ集制作の進捗状況について報告した。

### ◎ご講演

長門洋平氏

タイトル：映画産業における「サントラ」レコードの諸問題——初期角川映画と薬師丸ひろ子を中心に

要旨：近年、日本の大衆文化産業における「メディアミックス」についての学術的議論がみられるようになってきた。しかし、わが国のメディアミックスに関するこれまでの言説において、映画と音楽との関係に関するまとまった考察はほぼ皆無である。本講演では、1976年に設立された角川春樹事務所＝「角川映画」を代表するアイドル/女優/歌手の薬師丸ひろ子と、彼女の声を中心化した「サントラ」レコードに注目してみたい。スタジオ・システムおよび戦後日本映画の中核たるプログラムピクチャーの凋落から、異業種主導のメディアミックスへと時代の流れを決定的に印象づけた初期角川映画は、まさに日本映画界における「戦後」の終焉を象徴するプロダクションであったと言える。本講演の主眼は、薬師丸のサントラ・レコードに注目することで映画産業におけるサントラ盤の意義を整理するとともに、いわゆる「角川商法」が映画界に与えたインパクトを聴覚面から再考することにある。



長門洋平氏プロフィール：

国際日本文化研究センター機関研究員。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻、博士後期課程修了。博士（学術）。

『映画音響論—溝口健二映画を聴く』（2014年、みすず書房）にて、第36回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）受賞。

[http://www.msx.co.jp/event/07809\\_suntory\\_prize/](http://www.msx.co.jp/event/07809_suntory_prize/)

以上

（ふしきけい／中部支部担当常任理事、  
名古屋学芸大学メディア造形学部）

## 支部・研究会だより

# ショートフィルム研究会

林 緑子

### 事業報告並びに研究計画

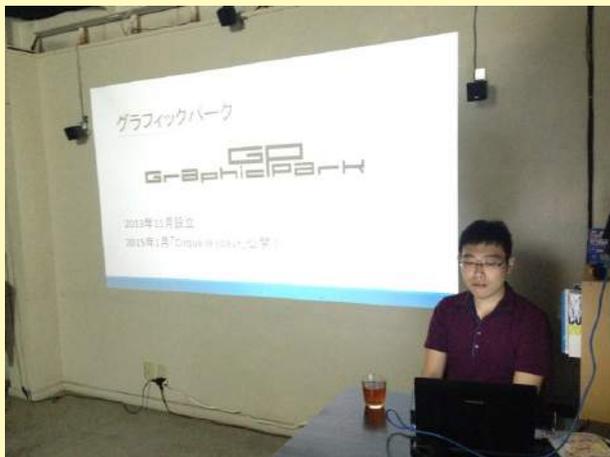
- 東海地方における映像文化の受容促進について -

2015年度研究会活動助成の交付を受けて、ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で、以下5件の開催を行いました。また、2016年の活動として、以下1件の開催を計画しています。

### 開催終了企画の事後報告

#### 第10回活動

会期名 アニメ・レクチャー ネット世代の自主アニメ制作  
 期日 2015年9月19日(土) 15時~16時半  
 講演者 秋吉亮氏  
 来場者数 8名  
 参加費 無料(別途、要1ドリンク注文)  
 会場 シアターカフェ  
 主催 シアターカフェ  
 共催 日本映像学会ショートフィルム研究会



秋吉亮氏は、高校時代に、商業アニメーター志望者との交流を通してアニメーターの労働問題を知り、独自に調査を開始した。大学時代は、学内ではアニメ研究会に所属して作品制作を行った。また、学外活動として、商業アニメ業界を目指す人たちのための団体COROMOを設立し、交流会や勉強会を開催してきた。社会人になり、アニメ制作団体グラフィックパークを設立。現役の商業アニメ業界人や業界経験者の参加もあり、商業アニメ的な制作方法をベースに、インターネットを介して共同作業し短編作品「Cirque le coeur」を完成させた。こうした経験を通じて、基礎技術や制作進行上のルールの研修と実践の場の必要性を実感した。今後も秋吉氏は、商業アニメ業界へ関わる試みを、既存とは違った方法を模索し、実践的に行っていきたいとのこと。来場者はアニメ制作や評論に興味がある社会人や業界経験者、大学でアニメーション制作を学ぶ学生などで、講演終了後に、引き続き、その場で交流会も行った。講演内容に関する質問や情報交換などもでき、インターネットを介して制作・発表される自主アニメ制作について具体的に知ることのできる機会となった。

#### 第11回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング2015  
 期日 2015年10月4日(日) 12:00-17:00  
 来場者数 100名(延べ)

#### 上映作品

##### Aプログラム

「ある家族の肖像」松井蛙(13分03秒)  
 「ファーザー×ファーザー」たかせしゅうほう(14分56秒)  
 「ECHO」澤田サンダー(13分29秒)

「30秒のセカイ」たかせしゅうほう(4分25秒)

##### Bプログラム

「おみまもり」穴田浩高/名古屋工学院専門学校(3分)  
 「surface tension」飯沼佑樹/名古屋工学院専門学校(3分45秒)  
 「Day Dream Café」西松祐紀/名古屋工学院専門学校(11分15秒)  
 「ちっちゃな手」内藤日和(1分17秒)  
 「can't wait」今西麻緒・杉山知穂/トライデントコンピュータ専門学校(1分23秒)  
 「集大成」内藤日和(1分27秒)  
 「縫う人」絵空(1分23秒)  
 「帰り道」鈴木智捺/愛知淑徳大学(2分)  
 「Tokoname night swim」萩原ゼミ ナイトスイム制作チーム/愛知淑徳大学(6分15秒)  
 「in KOBE」内藤日和(3分33秒)  
 「靴」山羊(5分29秒)

##### Cプログラム

「ワタシ カレシ ツクル」たかせしゅうほう(19分33秒)  
 「離婚前夜」中野森(15分)  
 「本当に見たいもの」たかせしゅうほう(3分26秒)

##### Sプログラム 特別上映 ISMIE 2014 セレクト作品集

「やおら」山中美奈代/京都精華大学芸術学部  
 「ゆめちゃん」袴田くるみ/日本大学芸術学部  
 「惑星」酒井彩貴/阿佐ヶ谷美術専門学校  
 「返事をする；繰り返す 繰り返した；消す；特に好き 特に好きじゃなくなった。」大内里絵子/北海道教育大学  
 「悪夢」本吉春菜/早稲田大学川口芸術学校  
 「pm04:28」所通菜・長谷川花歩/名古屋学芸大学メディア造形学部

参加費 無料

会場 愛知芸術文化センター 12階・アートスペース EF

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会

協力 日本映像学会映像表現研究会



第5回となる本上映会は、学生と一般の映像作品を公募上映し、東海地区を中心として映像文化を盛り上げかつ交流の場とすることを目的としている。今年度も公募などにより、特別上映作品を含む24作品が寄せられた。上映会では観客投票による観客賞を選出している。今回は、たかせしゅうほう監督の「ワタシ カレシ ツクル」と名古屋工学院専門学校学生制作による、西松祐紀監督の「Day Dream Café」の2作品を観客賞とした。特別上映は、ISMIE 2014 セレクト作品集を上映した。

#### 第12回活動

会期名 アニメーションテークス上映会

期日 2015年10月22日(金) 19:00-21:30、  
 10月23日(土) 13:30-17:30

来場者数 37名(延べ)

上映作品

Aプログラム (41分/7本)

- 「Fragments Of Journey」林勇気 (4分15秒/2014年)
- 「ドリーミー・ドリーム」ないうみさこ (2分43秒/2015年)
- 「SA YONA RA」松本力 (4分15秒/2013年)
- 「ドヴォニール」中村吉都子 (5分42秒/2014年)
- 「青色」伊藤仁美 (8分41秒/2015年)
- 「まんじう」Guy de Mon (ギ・ド・モン) ヨシムラエリ、佐藤亮、恒益愛衣、御庄員代 (8分30秒/2015年)
- 「ソウの王様と天使の筆」原田章生 (6分25秒/2015年)

Bプログラム (34分/6本)

- 「もうひとつの穴」永岡大輔 (11分45秒/2015年)
- 「帰り道」鈴木智捺 (2分/2015年)
- 「くまびよんたち」若見ありさ (2分45秒/1999年)
- 「air」若見ありさ (9分30秒/2000年)
- 「blessing」若見ありさ (2分/2011年)
- 「きみといる、いなくても、With Or Without You」松本力 (5分30秒/2008年)

Cプログラム「河原崎研究室卒業生作品セレクト」(42分/9本)

- 「星の銀貨」山岡沙織 (4分22秒/2014秒)
- 「HAKUTYUMU」(1分30秒)・「What is obent?」(1分42秒)・「YUENTLI」(42秒) 桑平美幸 (2012年-2013年)
- 「Theatre of Diary」堤琴絵 (8分25秒/2012年)
- 「ちょっとまって、きつねさん!」松本美紀 (7分56秒/2010年)
- 「UMA ファイル」尾崎祐太 (1分15秒/2007年)
- 「Na」八嶋有司 (5分24秒/2004年)
- 「愛の部屋」寺田めぐみ (10分39秒/2005年)
- 「WORK IN PROGRESS #1-Barcelona 2011」坂井淳二 (12分24秒/2015年)
- 「ばたばたまりたん」竹末侑加莉 (15分51秒/2014年)

参加費 長者町トランジットビル (N-mark): 無料 (別途、ドリンク・ご飯代500円)、シアターカフェ: 無料 (別途、要1ドリンク注文)

会場 長者町トランジットビル (N-mark)、シアターカフェ

主催 アニメーションテークス実行委員会

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

1日目の長者町トランジットビルでは、上映+作家トークと交流会を行った。2日目のシアターカフェでは、上映中心で開催し各上映後に来場作家の紹介を行った。作家と鑑賞者がそれぞれ交流し、作品や制作への理解が深まった。

第13回活動

会期名 ALIMO氏による、上映+講演+展示「メルヘンと遊び-エストニア滞在制作で得たもの-

●上映

日時 2015年11月8日(日)、28(土)、29(日)  
14:00/17:00/19:00

来場者数 19名

上映作品 (16分/2本)

- 「人の島」(6分32秒/2011年)
- 「開かれた遊び、忘れる眼」(8分39秒/2012年)

●展示

日時 11月7日(土)-29(日) 13:00-21:00

来場者数 75名

●講演

上映+トークイベント「エストニアでの滞在制作」

日時 11月7日(土) 15:00-17:00

来場者数 15名

参加費 無料 (別途、要1ドリンク注文)

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

後援 駐日エストニア共和国大使館

会場 シアターカフェ

後援 駐日エストニア共和国大使館



ALIMO氏は、エストニアの首都タリン市にある国立のエストニア芸術アカデミーに研究員として、文化庁と公益財団法人ポーラ美術振興財団の支援を受け、2年間滞在した。今回の講演では、現地の受け入れ先であるアニメーション監督/教授のブリート・バルン氏の制作やアトリ

エの紹介に始まり、エストニア国内におけるアニメーションの認知のされ方、製作体制、大学構成などを紹介した。続いて、滞在中にバルン氏と共同で着手した作品についてお話しいただいた。アンドレイ・タルコフスキー監督の映画『ストーカー』のロケ地が目前に広がる居住地に滞在したことから、同作のロケ地調査を開始し、資料収集を重ねた。また、2011年の東日本大震災についての自身の思いを作品に込めるため、記憶や資料を元にイメージを固めていった。手順としては、いくつか詩を書いて、それらを元に作成した脚本をバルン氏に見せ、主にナラティブについてディスカッションを行っていった。また、ビジュアル面では、油絵具によるデカルコマニーの技法で偶然的なイメージをテクスチャーに取り入れたり、テーマに沿ったイラストレーションによるイメージボード制作を行っていったとのこと。来場者からは、エストニアでの日常生活や日本のアニメーションの認知のされ方についてなど活発な質疑応答となった。さらには、海外でのアニメーション制作に関する情報やALIMO氏の制作過程を直に伺うことができた。また、ALIMO氏の作品上映と展示は、併せて鑑賞することで作品の素材や構成についてより知ることができる機会となった。



第14回活動

会期名 若見ありさ氏（日本映像学会会員）による、上映+講演+展示  
「Birth-つむぐいのち- 女性監督によるアニメーション」

●上映

「Birth-つむぐいのち- 女性監督によるアニメーション」

日時 2015年12月4日（金）14:00/19:30、  
5日（土）14:00、6日（日）14:00/19:30、  
7日（月）、9日（水）、10日（木）19:30

来場者数83名（大人63名、児童11名、乳児9名）

上映作品（62分/12本）

- 「air」若見ありさ（9分30秒/2000年）
- 「chorus」若見ありさ（4分26秒/2009年）
- 「sand animation集」若見ありさ（1分/2009-2011年）
- 「blessing0-5」若見ありさ（4分/2015年）
- 「DREAMS」荒井知恵（2分/2008年）
- 「鈍行列車」あしたのんき（4分30秒/2003年）
- 「FRANK'S FEAST」あしたのんき（2分/2005年）
- 「yokohama girl」あしたのんき（20秒/2010年）
- 「relax」あしたのんき（1分/2013年）
- 「6 pieces」あしたのんき（15秒/2013年）
- 「雪渡り」こぐまあつこ（13分30秒/2004年）
- 「Birth-つむぐいのち-」荒井知恵 こぐまあつこ 若見ありさ（19分/2015年）助成：文化庁文化芸術振興費補助金

●展示「作品ができるまで～制作の現場と思考。アイデアとイメージ」  
日時 12月4日（金）-12月27日（日）13:00-21:00（火曜定休）  
※最終日のみ-17:00

来場者数 145名

●講演

「砂が動き出すとき—アニメーションとドキュメンタリー— 日常と現実

と妄想」

日時 12月5日（土）講演 18:00-19:00

来場者数 6名

参加費 無料、要1ドリンク（500円）注文

会場 シアターカフェ

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会、Child Pokke



若見氏の講演では、これまでの制作活動の紹介に続いて、短編アニメーション作品「Birth-つむぐいのち」の若見氏のパートで使用されている技法を、映像や画像と共に紹介した。本作は、砂絵アニメーションとロトスコーピングの技法を用いて制作されている。本作の総合監督も務める若見氏は、自身の出産体験から出産・子育ての現実を知った。出産前に視聴した、お産についてのドキュメンタリー映像などから、出産体験について、映像を通じて伝えることの難しさを感じた。そして、実写ではなくアニメーションで制作することの意義を感じ、制作に至ったとのこと。今回は、出産経験のある女性へのインタビューを行い、その中から選んだ3つの体験をそれぞれ違うアニメーターが監督制作した。今後は、パートナーが出産した経験のある男性へのインタビューを元にした作品も制作予定。ドキュメンタリーアニメーションによる、出産についての記録と普及を継続していく予定とのこと。

上映には、多くの親子連れや出産に興味を持つ女性に参加し、連日賑わった。お産についてアニメーションで描いた作品は珍しく、実写ほど生々しくなく、アニメーションだから直視できるという意見もあった。また、ドローイング、砂絵、ピクシレーション、人形など、様々な技法による作品上映プログラムだったため、展示と併せて、アニメーションの多様性を、観客に体感してもらえる機会となった。

開催予定の企画概要

第15回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」  
期日 交流会：2016年5月・9月頃、上映会：2017年2月頃（予定）  
会場 未定  
主旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。

他、上映・講演などを予定

以上

（はやし みどりこ/ショートフィルム研究会代表）

## 支部・研究会だより 西部支部

伊原久裕

西部支部では、ISMIE 2014 学生作品上映会を、平成 27 年 10 月 24 日(土)に、九州大学大橋キャンパスにおいて開催された日本デザイン学会第 5 支部研究発表会にて開催しました。次に、平成 27 年度研究例会を下記のとおり開催しました。研究例会では、会員による発表が 1 件、学生発表が 2 件ありました。学生発表については、西部支部独自の発表形式で、学部生を含む非会員であっても、会員の推薦があれば発表可としています。

平成 27 年度映像学会西部支部研究例会・総会  
平成 27 年 11 月 28 日(土) 15 時～ 18 時  
九州産業大学 17 号館 6 階 601 教室

### 研究発表 1 創作ノート 映像音響詩《Reassembly》

発表者：中村滋延会員(九州大学大学院芸術工学研究院・教授)

《Reassembly》は「映像音響詩」と名付けられた映像付きの電子音響音楽である。私の映像音響詩には様々な種類があり、この作品は「評論としての映像音響詩」と位置づけられるものである。一般に評論は文章で表される。「評論としての映像音響詩」においては文章の代わりに、音響と映像によって作品の卓越性を主題として表そうとする。《Reassembly》は小津安二郎の歴史的名作《東京物語》の卓越性を音響と映像によって表現した作品である。

《東京物語》の特徴は物語の基本構造が明確に存在することである。それは題名に「物語」の語が入れていることに明らかである。その基本構造とは「行って帰る」というものである。この構造には「(東京に行く前)」と「(東京から帰った後)」、「こちら側(=尾道)」と「あちら側(=東京)」という対立関係がある。視覚表象における対立関係についてはこれまで多くの研究者・評論家が指摘してきた。しかし聴覚表象における対立関係についてはそれほど指摘されることはなかったように思う。東京物語を詳細に分析すると聴覚表象における対立関係を様々に発見することが出来る<sup>[1]</sup>

《Reassembly》は、2 時間 15 分の上映時間の《東京物語》を、その構造を保持したまま 6 分間に縮小し、映像とともに音響が物語の中の対立関係を豊かに彩っている様子を表現した。しかし素材は原作のままではあり得ず、また対立関係の彩り方はより象徴的になり、それは《東京物語》にインスパイヤされた完全なる「新作」である。

[1] 中村滋延「小津安二郎『東京物語』における対立関係を彩る物音」『芸術工学研究』九州大学大学院芸術工学研究院紀要第 16 号, 2012 年, pp.19-26

### 2) 【学生発表】「服飾の自己表現と心の関係性を描いた 2DCG アニメーション—The Choice is Yours」

発表者：田中梨咲(九州産業大学芸術研究科博士前期課程 造形表現専攻デザイン領域 2 年)、紹介者：黒岩俊哉

服装(服飾)とは着ている人物の内面や個性が表れた表象であろう。身につける人物の感情で服装は変化し、服によって感情が変化する。さらにそこに他者の目加わることにより、服自体の意味が変化することもある。人にとって服を選ぶ理由は様々である。好きな色や形、素材や動きやすさなど、目的や時と場所に合った服を、人は常に選択している。人が自分を表現するにあたり、服は極めて身近な存在である。服装はその人の内面の鏡であり、自分を表現するツールであると考えても良い。本研究では、服と自己表現、そして心理的な関係性を調査し、いくつかのケースを検討しながらユニークな 2DCG アニメーションを制作する。

### 3) 【学生発表】「フィルムサウンド分類法の整理—直近 20 年間の邦画分析を通して—」

発表者：三好悠介(九州大学芸術工学部)、紹介者：中村滋延

映画分析の一環として、1950 年代以降様々な分類基準を持つフィルムサウンドの分類法が提案されてきた。その中でもボードウェルとトンブソンの提唱する「音の次元」、シオンの提唱する「改訂版三等分円モデル」の 2 つが現在多く使用されている。しかし、それら多様な分類法には統一された見解は示されておらず、体系的な映画音響分析の手法は未だ確立されていない。本発表の目的は、邦画作品分析を通して前述の 2 つの分類法の対応関係、分析における不整合点を検討し、その結果と他の先行分類法をもとに音響的要素全てを包括できる新しい分類モデルの構築を目指していくことである。

### 総会

研究発表後に支部総会を開催し、講演会と研究例会を柱とする次年度の活動計画について話し合いを行いました。具体的内容については未定ですが、具体化次第告知する予定です。

以上

(いはら ひさやす／西部支部担当常任理事、九州大学)

## 支部・研究会だより 東部支部

奥野 邦利

東部支部につきましては、次回予定されている 3 月 19 日(土)理事会終了後に東部支部幹事会を予定しています。この際には、あらかじめ東部支部所属の研究会代表のみなさんに対して、支部活動及び支部運営についてのアンケートを行い、これについて検討を進めたいと考えています。

### (1) 東部支部幹事会規約について

規約については、特に変更はありません。

### (2) 東部支部における研究助成費使用規定について

研究助成費使用規定についても、特に変更はありません。

### (3) 東部支部における運営費使用規定について

現在の東部支部の運営状況を鑑みると、運営費については無理に予算消化することなく、これを柔軟に使用し、残金は年度ごとに学会本部へ返金することで、学会全体の活動費として有効に利用されることを期待しています。なお東北、北海道地区への活動補助については、前期からの引継ぎとして検討を続けています。

(おくのくにとし／東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部)

## 支部・研究会だより ビデオアート研究会

瀧 健太郎



ビデオアート研究会の様子

本研究会は、ビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足。以下に第13回のビデオアート研究会の報告を記します。



クリス・メイ＝アンドリュース氏をゲストに迎えてのレクチャー

日時：2015年10月12日（月・祝）17:00-20:30

会場：co-lab 渋谷アトリエ 2F 会議室 3

テーマ：ビデオアートの歴史を振り返る：初期ビデオアートとテレビ放送

内容：当研究会で何度か参考文献とした「ビデオ・アートの歴史 その形式と昨日の変遷」（三元社）の著者である、クリス・メイ＝アンドリュースを迎え、イギリスを中心にビデオアートの歴史と、また同時に進行していたテレビ文化とのクロスオーバーに関して紹介して頂く。

パネリスト：クリス・メイ＝アンドリュース（Chris Meigh Andrews/ セントラルランカシャー名誉教授・西イングランド大学客員教授）  
進行：瀧健太郎（ビデオアートセンター東京代表）

今回は自らも作家活動を行っているアンドリュース氏の幅広い見識から、主にイギリス・アメリカなどのビデオ作家の作例を辿りながら、あまり語られることのないテレビとビデオ、放送とアートの往来に関する貴重なレクチャーをして頂くことができました。

テレビ、ビデオはカメラ、モニターなどの技術的な背景と、中継・即時性というメディアの特性を共有しながらも片方は広域放送分野として、後者は現代美術分野の出来事として、横断的に見られることは多くありませんでした。アンドリュース氏の挙げる例により、1960年代後半に産声を上げた初期ビデオアートに関わるアーティストの何人かは、広域放送としてのテレビジョンを「自宅に居ながらにしてアート鑑賞ができる」という潜在的な観客であるとみなしていたことが分かりま

した。またそこで行われた数々の表現の試行では、物質性に囚われないアートの提示という新たなメディアの可能性を作り手が感じていたこと、文化の発信方法として非中心的な構造と、また手法のフレキシビリティを意識していたことなどがわかりました。

ビデオアートの研究において、閉じた一つの表現区分として捉えるのではなく、同時代のこうした文化的な背景との関係性の中で考えることについて改めてその重要性を認識することができる、今後の研究活動につながる充実したお話をして頂くことができました。

参考リンク：

<http://www.meigh-andrews.com/>

[http://www.sangensha.co.jp/Author/author-Meigh-Andrews\\_Chris.htm](http://www.sangensha.co.jp/Author/author-Meigh-Andrews_Chris.htm)

\*ビデオアート研究会はメーリングリストで研究会の情報や資料などを共有しております。研究会参加ご希望の方は、瀧までご一報ください。

（たき けんたろう／ビデオアート研究会代表、  
NPO 法人ビデオアートセンター東京）

## 支部・研究会だより ドキュメンタリードラマ研究会

杉田 このみ

本研究会は下記のとおり第2回研究会を開催した。

■日時 2015年11月28日（土）14時00分～16時40分

■会場 専修大学 神田キャンパス 7号館 763教室

■テーマ

ドキュメンタリードラマ研究の射程について考える

■式次第

14:00 開会 挨拶

14:05-14:30 発表1「これまでのドキュメンタリードラマの探索～データベース構築に向けて～」杉田このみ（千葉商科大学）

14:30-15:00 発表2「モキュメンタリードラマの現在」中垣恒太郎（大東文化大学）

15:00-15:30 発表3「高校での映画教育から生まれる作品の可能性」  
昼間行雄（文化学園大学）

15:40-16:40 パネルディスカッション

■概要

発表1では、テレビ番組のなかから「ドキュメンタリードラマ」について調査し、それで一覧化された約80番組の概要について発表。調査では、「現在の視聴可否」も含めた。

発表2では、90年代から多く見られた海外のリアリティ TV や疑似ドキュメンタリーについて具体的な作品を取り上げ、虚構と現実を行き来し、またその境界をあいまいにし、探っていく映像表現が、いかに有効であるか、それが現代の表現にいかにつながっているかの考察について発表した。

発表3では、埼玉県立芸術総合高等学校映像芸術科の高校生たちが、授業で制作する映像作品（ドラマ）について考察する。授業という限ら

れた時間、空間と、高校生という思考や技術の未熟さ、特殊な人間関係から生まれる作品には、独特のリアリティを持つこともある。教育のなかで、「自分の生活」を基点にドラマを描く可能性について発表した。



パネルディスカッションでは、参加者5名も含め、ディスカッションを行った。少人数ながらも、参加者には、フリーで活躍するテレビディレクターや、メディア研究者、現役カメラマンなど多彩な顔ぶれで、活発なディスカッションがなされた。過去と現在のメディアの特性の違いについて、そこから生まれる表現のあり方をドキュメンタリーの歴史も踏まえながら議論を深めた。また、デジタル技術の革新により、安価で高画質のカメラが誰でも扱えるようになった一方で、若手映像制作者の基本的な技術の知識の欠如などが指摘された。

(すぎた このみ/ドキュメンタリードラマ研究会代表、千葉商科大学)

## 支部・研究会だより アナログメディア研究会

西村 智弘

### 【活動報告】

#### ①「ヒカルオンナ 実験映画の女たち」

アナログメディア研究会は、2015年11月28日(土)、渋谷のUPLINK FACTORYで、「ヒカルオンナ 実験映画の女たち」を開催した。これは、女性作家による実験映画を集めたプログラムであり、すべてフィルム(8ミリ、16ミリ)で上映を行った。UPLINK FACTORYでの上映は、一昨年の「アメリカの実験映画」、昨年の「フィル・ソロモン作品集」の続いて三回目である。アナログメディア研究会の主催事業であり、今年最大のイベントであった。

女性作家の実験映画を集めることは、きわめて珍しい試みであった。企画担当は徳永彩加で、Aプロ(日本作品)のキュレーションも務めている。Bプロ(欧米作品)のキュレーションは、フランスの実験映画作家フレデリック・デヴォーに依頼した。Aプロの上映後に出品作家によるトークを行い、Bプロの上映後には、事前にスクイブを通じて行ったフレデリック・デヴォーの作品解説を流した。Aプロは、入り切れない人が出てくるほどの満員で、Bプロでもほぼ席が埋まっており、いずれのプログラムとも盛況であった。

企画内容(案内文より):

女性×実験×フィルム

国内外の女性作家のフィルムによる実験映画をすべてフィルム映写機で上映!

フレデリック・デヴォーやセシル・フォンテーヌなど、欧州の女性作家をはじめとしたライトコーン(パリ)所蔵の16ミリフィルム作品!日本人作家では、葉山嶺、徳永彩加などの若手、浅野優子や宮田靖子の実力派フィルムメーカーによる16ミリ、8ミリ作品の上映です。現在の日本では、女性のフィルムメーカーが多いとはいえません。しかし、フィルムでの制作が難しくなってきた現在でも、フィルムで制作を続ける女性たちは確かに存在します。また、海外にも素敵な女性作家が多くいるにも関わらず、日本で上映されることが極端に少ない状況です。この機会に女性作家の実験映画が引き出す力強さ、儚さ、美しさ、繊細さといった魅力をじっくりとご覧ください!



上映された作品は以下のとおりである。

Aプログラム: 田端志津子「three minutes out」、黄木可也子「紅花の影色染め」、小畑円香「とどまることなかれ」、宮田靖子「ひかりぬけて」、三井彩紗「short-term memory」、三谷悠華「RIKO」、中原千代子「行ったり来たり」、遠藤萌美「pureness」、徳永彩加「隙」、白木羽澄「架空旅行」、浅野優子「蟻の生活」、葉山嶺「Reportage!」

Bプログラム: ジェルメーヌ・デュラック「Disque 957」、

マルティヌス・ルツセ「Un vent léger dans le feuillage」、セシル・フォンテーヌ「JAPON SERIES」、フレデリック・デヴォー「ELLIPSES」、マーサ・コルバーン「Cats Amore」、ローズ・ローダー「SOURCES」、マルセル・ティラッシュ「Fenice」、ミッシェル・ボカノフスキー「FENETRES」、フレデリック・デヴォー「K (Berberes)」、マヤ・デレン「カメラのための振付けの研究」



「ヒカルオンナ 実験映画の女たち」会場風景

#### ②8ミリフィルム・映像インスタレーション/ワークショップ

10月31日と11月1日の両日、「第27回武蔵野はらっぱ祭り」が開催され、そのなかで8ミリフィルムによる映像インスタレーションの野外展示が行われた。主催は、8mmFILM 小金井街道プロジェクトであり、アナログメディア研究会は共催というかたちで参加し、初心者のためのワークショップ、および映像インスタレーションの展示を行った。

### ③実験映画上映「フィルムにとって映画とは何か」

11月21日(土)、「阿佐ヶ谷アートストリート」の関連企画として、「フィルムにとって映画とは何か」と題する実験映画の上映が行われ、アナログメディア研究会が協力している。企画担当は太田曜であり、会場は阿佐ヶ谷のアートスペース煌翔であった。

#### 企画内容(案内文より)：

映画のメディア(支持体)は百年以上前から最近までフィルムだけだった。フィルム映写機で暗い部屋のスクリーンに映写し、みんなで見るのが映画だった。今、スマホの画面で見るモノも“映画”だ、などと言われる中で、原点にかえてフィルムで作られた映画を暗い部屋で、フィルム映写機による映写で見る。これは“映画とは何か”を問い直すことでもある。

上映作品は以下の通り。宮崎淳「心霊映画」、徳永彩加「光る女」、川口肇「FORMOSA BLUE」、太田曜「フランスバニングコック隊長の市警団」、水由章「SUBTLETY」、大島慶太郎「THINKING DOT」、末岡一郎「キノフフラグメント(Filmfragment)」、能登勝「IN A SHRINE」、伊藤隆介「Kdybych byl špión(私がスパイだったら)」、谷岡昭宏「ミートボールブーン」、奥山順市「まぜるな」。

#### 【活動計画】

来年の3月中頃、札幌で「アナログメディア・カンファレンス」(仮題)を行う予定である。「奥山順市特集」他の上映が計画されている。

(にしむら ともひろ/アナログメディア研究会代表、東京造形大学)

## 支部・研究会だより クロスメディア研究会

李 容旭

第9回クロスメディア研究会の研究発表を下記のごとく開催しました。

開催日時：2015年11月28日(土) 14:00-18:00

開催場所：大妻女子大学千代田キャンパス

F棟4階F444教室

〒102-8357 東京都千代田区三番町1-2

03-5275-6026 (斉藤恵)



以下研究発表者、タイトル、概要です。

### 写真技法の変遷

—フィルムからデジタルカメラへの移行—

相田 アキラ (ゲスト、清里フォトアートミュージアム)



#### 1 研究の背景

1990年代、デジタルカメラは、量販店で購入できる価格帯になった。代表的な例が、1995年発売のカシオ「QV-10」(25万画素)である。以降、販売されるカメラは、フィルムからデジタルへと徐々に移行した。同時に、デジタルカメラに搭載されるイメージセンサー(撮像素子)の性能は急速に向上した。2015年、イメージセンサーの有効画素数は、5,000万画素を超えた(キヤノン「EOS5Ds」「EOS5Ds R」等)。現在、店頭で販売されるカメラは、圧倒的にデジタルである。

#### 2 研究の目的

写真は、これまでに新しい素材や技法を取り入れて発展したメディアである。1990年代以降、それまで一般的であったフィルムに代わり、デジタルカメラが写真の代表的なツールになった。そこで、フィルムからデジタルへと移り変わった際の出荷台数や出荷金額を調査した。併せて、2000年代の学会誌・写真専門雑誌に掲載された写真家、研究者の記述を調べ、当時の状況を調査した。上記を踏まえ、今回の研究は、フィルムからデジタルカメラへと技法の移行が進んだ際の動向を検証するものである。

#### 3 研究の内容

1839年、ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールがダゲレオタイプ(銀板写真)を発表すると、写真術は短期間で世界中に広まった。以降、それまでの写真技法の欠点を補う新しい技術が発明された。代表的な例として、ウェット・コロジオン・プロセス(湿板写真)、ドライプレート(乾板)、フィルム(モノクロからカラー)等である。ベースは紙やガラス、ニトロセルロースから不燃性の素材になり、乳剤はモノクロからカラーが一般的となった。

1990年代、デジタルカメラは一般市場に登場したが、当初、価格や画質などの点でフィルムカメラより劣っていた。2000年代になり、デジタルカメラは、搭載するイメージセンサーの能力が向上したことで、フィルムカメラと遜色が無くなった。さらに、デジタルカメラは、パソ

コンや画像処理ソフトの性能向上に伴ってシェアを伸ばしていった。

一般社団法人カメラ映像機器工業会 (CIPA) が発表した資料によると、1999年、デジタルカメラの出荷台数は、フィルムカメラの6分の1程度であった。しかし、2002年に反転し、デジタルカメラの出荷台数がフィルムカメラを上回った。そして、一般社団法人カメラ映像機器工業会は、統計上の要件を満たさなくなったことから、2008年2月をもってフィルムカメラの出荷台数等の発表を終了した。一方、出荷金額については、2000年には反転し、デジタルカメラがフィルムカメラを上回っている。

また、2000年代前半に発行された学会誌・写真専門雑誌を調べると、デジタルカメラと周辺機器についての記載が多い。中でもカメラについては各メーカーが頻りに新型を発表していることが確認できる。一方で、フィルムカメラで使用する感光材料等の販売が縮小することを嘆く意見も少なくなかった。

#### 4 研究の結果

一般社団法人カメラ映像機器工業会の資料から、フィルムカメラからデジタルカメラへ、写真技法の移行が起きたのは、2000年代の前半を軸にした±5年である。移行期間が長いのは、フィルムカメラの販売実績が少ない状況でも、これまでに販売されたフィルムカメラや、中古品等を使用するユーザーが活動していることによる。そして、2010年代においても、フィルムカメラを使用するユーザーがおり、全てがデジタルカメラに移行した訳ではない。このことから、フィルムからデジタルカメラへの移行は、これまでの技法を残しつつ、徐々に新しい技法へと移行変わっていくオーバーラップ型であると言える。

また、デジタルカメラの出荷金額については、2000年にはフィルムカメラを超えている。出荷台数が少ないにもかかわらず、金額が大きいのは、デジタルカメラの販売価格が、フィルムカメラよりも高価であったことを示している。デジタルカメラは相対的に高価であったが、その後の出荷台数は伸びた。

一方、デジタルカメラの出荷台数が増加する中で、新しい技法に対する批判的な意見は多かった。それは、(1) デジタルカメラに対して、画質の低さから、(2) デジタルについての技術の習得と新しい機材の取得に迫られて、(3) フィルムなど、これまでの商品が市場から消えていくことに対して、などの理由が代表的であった。

さらに、ユーザーがデジタルカメラへの移行について否定的だった理由の1つは、写真が常に新しい技法を取り入れてきたという事実を認識していなかったことが考えられる。前段において、写真がこれまでに新しい技法を取り入れて進歩してきたことを記してきた。しかし、ユーザーは長期間フィルムを使用してきたことで、新しい技法が登場する認識に欠けていた可能性がある。

これまでの写真技法の変遷を踏まえると、現在主流となっているイメージセンサー (CCD や CMOS) を搭載したデジタルカメラについても、やがては新しい技法、あるいはシステムに移り変わっていくと考えられる。一方で、現在でもダゲレオタイプやウエット・コロジオン・プロセスで制作している写真家が存在していることから、古い技法が完全に消えてしまうことはない。以上から、写真は古い技法を残しつつ、常に新しい技法を取り入れ発展することで、技法の違いによる写真表現の幅も広げているということになる。

#### 5 課題

今回の調査は、カメラの出荷台数と出荷金額に限った検証作業であった。さらに、フィルムの出荷数についても調査をすることで、より正確な検証が行えるものとする。

しかし、2000年代には、コニカやヨーロッパに拠点を置くアグファが、フィルム事業から撤退し、フジフィルムもフィルム部門の大幅なリストラを行った。写真界の巨人と言われたコダックは、連邦倒産法第11章の適用を受け、現在再建中とされている。上記からも、この時期にフィルムの売上げが急速に減少したことが伺える。これはフィルムカメラとデジタルカメラの動向にも合致している。

—

相田アキラ (ゲスト発表)

1968年、東京生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業、日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻修士課程修了。著作、「メディアの変遷」『芸術とメディアの諸相』(タイケン学園、共著、2013年)、「報道写真家「ロバート・キャパ」」『芸術メディア研究会季刊誌 第1巻・第1号』(芸術メディア研究会、共著、2009年)。個展、「Slowmotion」(ギャラリー・ストークス〈東京・青山〉2009年12月)。日本写真芸術学会会員。

以上

「外地」への憧れ—メディアとしての漫画—

牛田 あや美 (会員、京都造形芸術大学)

戦前・戦中における「漫画」のなかに描かれた当時の戦地・植民地であった“異国「外地」”の姿から子どもたちは、どのようにメディアを享受したのかを発表した。戦前における“異国「外地」”への旅、戦中では部隊とともに従軍している漫画家たちもいた。カメラマンだけでなく、画家や漫画家たちも従軍していることを鑑みると写真だけでなく「絵」も戦争のプロパガンダとして使用していたことは明らかである。戦時下における“異国「外地」”の表象を通し「絵」に描かれる物語、それに付け加えられる「文章」によって、いまだ闇となっている戦時下の「漫画」。戦前の雑誌『少年倶楽部』を見ると台湾人の少年が投稿している。読者は日本人だけでなく、植民地下の人々もいた。戦時下、漫画家は翼賛体制に協力せねばならず、戦後彼らは公にそのことに触れることを避けてきた。「漫画」・「挿絵」のなかに描かれた「外地」の姿はアンタッチャブルな問題としてそのまま残されている。

映画は映画館という場所、機材のあるところでないと観ることができない。特に子どもは大人と一緒にでなければなかなか行けないのが映画館であった。

しかし、紙媒体の雑誌は違っていた。子ども雑誌は、子どもが最も情報を手に入れやすいメディアであった。教育と密接に関連している雑誌もあり、大人がいなくとも、子どもだけで楽しむことができた。1冊の本や雑誌と一緒に4、5人で見る、あるいは1冊を回して読むなどしていたことにより、販売部数以上に子どもメディアは大きな影響力を持っていた。実際、『少年倶楽部』では何度も、個人で雑誌を買うよう宣伝している。子どもの好きそうな付録を頻りにつけ、付録目当てに購買させるよう販売促進にも力を入れている。戦前に子ども時代をおくった人々(終戦後の貧しい時期に子ども時代を送った人々も同じである)の記録を読んでみると、この回し読みについては頻りに言及されている。仮に1冊の雑誌を10人以上の子どもが読んでいたと考え、最盛期には75万部も発行していた『少年倶楽部』は、750万人以上の子どもが読んでいたことになる。子どもが雑誌をめくる。そこに描かれた文章、写真、絵をみるにより子どもたちは無意識のうちにアイデンティティが形成される。

漫画に限って言うと『少年倶楽部』に「のらくろ」が掲載されると、子どもたちに人気が出てきた。キャラクターグッズはもちろんだが、のらくろを使用した広告など、商品を買わせるための仕掛けは現在以上で

はないかと思うほどの使用過多である。

雑誌の編集方針、そこで選ばれる大人の作家、画家、漫画家など、彼らの考えをダイレクトに子どもたちへと伝えることができた。読者は日本だけにとどまらず、朝鮮、台湾などの日本の植民地にまで広がっていた。

日中戦争が始まると、国家統制による児童図書浄化運動がすすめられた。1938（昭和13）年10月には、内務省警保局図書課より「児童読物改善二関スル指示要綱」が通達され、俗悪な児童図書が発売禁止処分となり、翌年は文部省推薦図書制度が改正された。

日米開戦間近には戦争協力への要請が厳しくなり、1941（昭和16）年6月には、日本出版文化協会が出版前に原稿を査閲し、用紙を割り当て配給する制度を実施した。そのような背景のなか当時の子どもたちは、雑誌というメディアから情報をつかみ、そこに描かれている物語や絵から「憧れ」を抱いていた。

本発表はJ S P S 科研費 26580043の助成「戦時下の漫画に描かれた戦地及び植民地の表象研究」による研究成果の一部である。

以上

## 1940年幻の東京オリンピックからの連続性を辿る

柴岡 信一郎（会員、日本ウェルネススポーツ大学）

本発表では、戦況の悪化により開催を返上し幻に終わった1940年東京五輪を取り上げた。同五輪の公式プログラム冊子、報告書を基に考察。これらの資料によると開催返上の時点で競技会場の多くが決定していたことが分かる。これらの資料と現在の地図と照らし合わせて、競技会場予定地の今日の現況を写真撮影し記録。以降の1964、2016、2020年と続く東京五輪構想における連続性を報告した。競技会場は75年以上を経て、現在でもその痕跡は多々ある。共通しているのは、競技会場が広大な敷地であったため、大規模な造成、建設を伴う跡地利用が進められたことである。1940年東京五輪構想はその後の1964年東京五輪に様々な形で引き継がれた。一例として、現在の駒沢公園周辺は1940年東京五輪のメイン会場予定地であり、それを引き継ぐ形で1964年東京五輪では第二会場として活用された。駒沢は東京五輪を契機にインフラが整備され、住宅街としてブランド化されたのである。その他、現在の首都圏には、1940年東京五輪から派生する連続性がいたる所に存在する。

以上

## 子どものために書かれたピアノ作品

～練習曲を中心に～

齋藤 恵（会員、大妻女子大学）

子どもやピアノ初心者のために書かれたピアノ曲には、大きく分けて二種類のものが存在する。

- (1) 教則本・練習曲
- (2) 教則本・練習曲以外の曲

子どもや初心者はピアノ教本（教則本）を一通り終了すると練習曲に進むのが一般的である。教則本では『バイエル・ピアノ教則本』がもっとも有名で、そのつぎに練習曲の『ツェルニー（100・110・30・40・50・60番など）』と『ハノン・ピアノ教本』を併用し

ながら進むコースがこれまでは定番となっていた。しかしこのコースには批判も多く、実際、このコースについていけない子どもや初心者も珍しくない。現在、『バイエル教則本』に代わるものとして、『バスティン』『バーナム』『トンプソン』『メトロロズ』『アルフレッド』などの教本をはじめ、邦人（高橋正夫、田丸信明、樹原涼子など）作曲家による教本も数多く出版されている。発表者自身は『バイエル』～『ツェルニー』～『ハノン』コースを歩んだが、発表者の指導経験では、『バイエル』の途中で行き詰ったピアノ初心者に対して、すぐに『バーナム』を与えたことにより、行き詰りから再起した事例がある。またピアノの生徒の中には『バイエル』は終了したものの、『ツェルニー100番』や『ツェルニー30番』なかばまで進んだところで、挫折する者も見られる。発表者自身は中学生の頃に、ピアノ教師が変わったことが原因で、『ツェルニー40番』全曲を二回も弾かされて、いささか閉口した思い出がある。発表者は結局、『ツェルニー練習曲』シリーズは40番まででやめ、別の練習曲（クラムマー＝ビューロー、モシユコフスキーなど）に移行することになった。これらの経験から、発表者はピアノに関して、一つの教材で先行かなくなった場合には、その教材にこだわらず、別の教材に切り替えた方が生徒のためによいのではないかと思うようになった。

さらに、子どもや初心者の中に、練習曲に対してはあまり気が引けないが、それ以外の曲なら弾く気になるという者も少なくない。こうした者たちには練習曲の機能をもっているが、各曲に子ども向けに可愛らしいタイトルが付けられている曲集を弾かせるとういだろう。その曲集の代表的な例が『ブルグミュラー練習曲（25・18番）』である。「ピアノを習い始めた者たちには、出来るだけ長くピアノを続けてもらいたい」とピアノを指導したことのある者なら、誰しもそう願うはずである。そこで多くの子どもたちやピアノ初心者たちに、出来るだけ長い期間、ピアノを続けてもらうために、ピアノ指導者はいろいろな手段を考え出さなくてはならない。その中でもとくに以下の三点を考えることが重要であると思われる。

- (1) その生徒に合った教材選択
- (2) 教材の使用順序
- (3) 教材の組み合わせ

以上

## 「現代芸術」と「ビジネスアート」の相異

宮田 徹也（会員、日本近代美術思想史研究）



アメリカ独立宣言(1776年)、フランス人権宣言(1789年)、イギリス産業革命(1750～1850年代)という闘争を経て人類が獲得した「自由」は流通拡張と人口増加を培養し、「平等」が「贅沢」を促す市場経済という欲望の競争の顛末は即ち戦争であった。

歴史的建造物が灰燼に帰し、人間が人間を人間と思わず大量殺戮する世界大戦を目の当たりにしたアーティスト達は、神や王、君主に帰属しないちっぽけな存在である「我々が此処に居てよい」ことを証明するために「現代芸術」を「発見」した。

無鑑査・無褒章・自由出品の美術展、アンデパンダン展もまた、資本主義が確立した後の1884年にフランスのパリで開催され始めたことも見逃せない。モネやゴッホのモダニズム絵画の価格上昇と、アメリカ抽象表現主義やポップアート作品の価値増大の違いにも留意すべきだ。

今日、NYC、北京、ロンドンで競売されている「ビジネスアート」と1915年当時の「現代芸術」は、厳密に峻別されるべきである。

ある日、私は画廊で優れた現代美術作品を目の当たりにしていた時、以前、さるコレクターが私に語った言葉を思い起こした。「この作品は私(コレクター)が持つべきではなく、資格がない」。

この言葉の意味を私は「作品が凄まじいために、凡庸な私(コレクター)では耐えられない」と解釈していた。しかしこの日、私はこの言葉を「この作品を手に入れることは、私(コレクター)の価値観を全て否定されることになる」という意味ではないかと邪推した。

優れた現代美術作品は、便宜上、値段がついていようと貨幣経済に還元されることはない。資本主義、共産主義、社会主義など、現存する価値観では量れない全く別の価値を、作品それぞれが多様に持っている。そのため、富裕であればあるほど、現代美術を避ける傾向が生れる。

1915年当時に発見された「現代美術」と、今日、世界を席卷する「ビジネスアート」を比較する。

現代美術→多様。優劣、競争、権力が無い。他者と自己を尊重する。自己の存在を探究する。

ビジネスアート→傾向が存在する。コレクターに高額で売買されるために制作される。

我々は素晴らしい人間と出会える喜びと同じように、望めば素晴らしいアートといつでも出会うことができる。この無上の喜びは何物にも代えることはできない。それを意識するかしないかによって、人生に大きな変化が生じる。そしてこの喜びは人との出会いと全く同様、決して消え失せることなどは無い。この傾向を民主主義ではなく人間の本质と説明するのが今後の課題である。

#### 参考文献

村上隆『芸術闘争論』(幻冬舎/2010年)

ダニエル・グラネ&カトリヌ・ラムール著/鳥取絹子訳『巨大化する現代アートビジネス』(紀伊国屋書店/2015年)

以上

ヒット曲は必要か？

自己目的化社会から自己共生成社会へ向けて

河合明(会員、芸術メディア研究会)

資本主義社会が植民地からの安い労働力と原材料を背景に発展して来たことはまぎれもない事実であり、そこには必然的に格差社会を生む構造が含まれている。そのためマルクス主義やケインズの経済学はそのような格差がある程度是正する一助になったと言えるだろう。

しかし今日の情報と金融を中心としたグローバルな社会状況において、経済的・社会的格差の問題に対処するには新たな政策の創出が必要となっているのである。たとえば「新自由主義」は規制緩和を促進し市場メカニズムによる経済全体を活性化させるトリクルダウン(富裕層をさらに富ませれば貧困層の経済状況が改善する)によって問題を解決しようとするなら、リベラリズムはNPOなどの「社会的起業」のように「人間は誰でも始めから社会的存在であり、皆平等である。」という公平な富の分配にある。しかしどちらにしても経済成長による安定的な富の創出が不可欠なのであるが、先進国の経済はもはや限りない拡大をめざす消費社会ではなく、むしろ物資や製品は生産過剰に置かれている。

その象徴の一つが商品の自己目的化である。ハードウェア分野は短期的に商品のバージョンアップを行い、使いもしない機能を付加して販売し、無理矢理需要を創出し資本を転回させる。一方ソフトウェア分野ではどうだろうか。たとえば商業音楽において売れる曲の多くはその曲の内容がどうあれ、CMかテレビ番組のテーマ曲となっている。つまりヒットした曲が放送されるのではなく、放送することによってヒットさせるのである。また本の出版業界では、出版不況と言われながら、再販制度を背景に本が売れないがゆえに本を大量に出版しているのが現状なのである。従って自己目的化とは文字通り生産者は生産すること消費者は消費すること自体が目的となっているのである。

このような状況に「新自由主義」や「リベラリズム」の考えは社会的問題の解決にはたして有効な手だてなのだろうか。そのような疑問を示しつつ今必要なのは、富のフラットな関係による個と個の共有、それはリベラリズム+コミュニタリズムによるあらたなコミュニケーションの創出ではないだろうか。これを「自己共生成社会」と名付けることにしようと思う。それはどのようなことか。3つ指摘すると

1. ベーシックインカムを導入
2. NPOに代表される社会的起業の発展と充実、
3. 情報や物資のフリーウェア化

である。1と2については国家レベルでの政策転換が必要なので詳しくは触れなかったが、3については今日からでも実践可能である。それは端的に言えば物を所有しない生き方であり、またクライアント中心主義(主従関係)からネットワークを通じた緩やかな関係性を基に長期的ビジョンや目的を固定するのではなく、その都度判断しながら生成(創成)することにある。(発表では世界の電子自己出版のそれぞれについて述べた。)それにはなにより私達の自己意識改革が不可欠なのである。

以上

(り ょんうく/クロスメディア研究会代表、  
東京工芸大学芸術学部映像学科)

支部・研究会だより

## 映像テキスト分析研究会

中村 秀之

2015年度第1回(通算第12回)の研究発表会を下記の通り開催しました。

日時: 11月28日(土曜日) 15:00開始~18:15終了  
 会場: 立教大学池袋キャンパス5309教室(5号館3階)  
 発表者: 木下耕介会員(群馬県立女子大学)  
 討論者: 木村建哉会員(成城大学)  
 表題: パズル・フィルム、焦点化の限界、そしてもう一つの系譜  
 ——クリストファー・ノーラン『メメント』を例に

参加者は15名でした。90分以上に及ぶ木下会員の重厚な発表と木村会員のコメントにつづいて、1時間近い活発な全体討論を行ないました。今回は発表者の木下会員に簡潔な報告をご執筆いただきましたので以下に掲載します。

本発表ではクリストファー・ノーランの『メメント』を取り上げた。本発表が主張したい点は大分して3点あった。ひとつは、今日一部の研究者・批評家に「パズル・フィルム」と呼ばれる、複雑ないし曖昧な物語叙述に特徴を持つ映画群の中にある多様性——とりわけ、基本的には古典的ハリウッド映画の規範に従属するこのジャンル内に、その規範からの本質的な逸脱を示すものが存在するという——を指摘することであり、『メメント』はまさにその好例と見なしようということである。二点目は、その逸脱性が『メメント』の場合、「焦点化(focalization)」の理論モデルによる説明不可能性として——同概念が暗黙裡に対象としてきた特定の物語テキストの数的有限性、及びその外部のテキストの存在を実証するものとして——浮かび上がるということである。そしてさらに、これが三点目の主張になるのだが、この古典的規範と逸脱の間の差異が、各々のタイプの映画が前提とする二種類の登場人物の記憶観——カルテジアン劇場のモデルと虚偽記憶のモデル——に由来する、ということである。これらの主張に対し、フロアからは多くの有益な質問とコメントをいただいた。その中には例えば、『メメント』の物語構造もまた主人公の記憶障害に動機付けられているという点で、依然古典的な物語叙述の規範に準じているという指摘や、そもそもこの趣向が語りの審級と登場人物の記憶とをショートさせているという点に留意すべきだという指摘、あるいは問題設定に対する検証対象(パズル・フィルム)の選択の妥当性の問題への疑義などがあった。確かに、本発表の理論的仮説は、より広範に芸術映画の種々の実践(例えばヌーヴェル・ヴァーグ)をも射程に入れた上で検証されるべきであったかもしれない。しかしながら、ある一定の主張はできたのではないかと考えている。今後はいただいた指摘を踏まえて議論を深めていきたい。【以上、報告】

なお、2015年度第2回(通算第13回)の新年早々の開催も下記の通り決定しています。すでに学会サイトや会員向けメール・ニュースで告知していますので、詳細はそちらをご覧ください。

日時: 2016年1月9日(土曜日) 15時30分開始~18時(終了予定)  
 会場: 立教大学池袋キャンパス4号館別棟1階4151教室  
 発表者: 玉田健太会員(早稲田大学大学院)  
 表題: 雪解けの前に  
 ——ニコラス・レイ『危険な場所で』のラストシーン再訪

(なかむら ひでゆき/映像テキスト分析研究会代表、  
立教大学現代心理学部映像身体学科)

支部・研究会だより

## 映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

「映像表現研究会」報告と計画について

第9回となる<インターリンク学生映像作品展:ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2015>を10月末に東京(日本大学芸術学部江古田校舎「大ホール」)、11月末に京都(京都市下京区「Lumen Gallery」)で開催しました。

今回は全国21校の映像メディア系大学及び専門学校の学生作品を、会員による推薦をもって上映しました。

<参加校>

阿佐ヶ谷美術専門学校/イメージフォーラム映像研究所/大阪芸術大学芸術学部/大阪成蹊大学芸術学部/九州産業大学芸術学部/京都精華大学芸術学部(2015年度幹事校)/久米工業大学情報ネットワーク工学科/尚美学園大学芸術情報学部/情報科学芸術大学院大学[IAMAS]/成安造形大学/宝塚大学東京メディア芸術学部/玉川大学芸術学部/多摩美術大学映像演劇学科/東京工芸大学芸術学部/東京造形大学/東北芸術工科大学映像学科/名古屋芸芸大学メディア造形学部/名古屋市立大学芸術工学部/日本大学芸術学部(2015年度幹事校)/北海道教育大学/武蔵野美術大学造形学部

また今後、代表作の中から各校の推薦教員による投票によって「ISMIE2015学生選抜作品集DVD」の作成を行い、次回大会にて報告を予定しています。

<東京会場>

日程: 10月24日(土)・25日(日)  
 会場: 日本大学芸術学部江古田校舎 大ホール

東京会場は、10月24日(土)、25日(日)の2日間、日本大学芸術学部江古田校舎大ホールにて実施しました。

24日は13:00~15:40に各代表作品(10分2作品以内)を2プログラムに分けて上映し、16:00~18:00には作品推薦教員による公開ディスカッション「映像表現とその教育」を行いました。尚、公開ディスカッションの報告は次回会報にて行います。

25日は11:00~18:00に各校25分以内で推薦された全作品をA~Eの5プログラムで上映しました。両日の入場者数は約100名でした。詳しい上映作品については、以下のホームページを参照して下さい。

< [http://d.hatena.ne.jp/e\\_h\\_kenkyu/](http://d.hatena.ne.jp/e_h_kenkyu/) >



会場の日本大学芸術学部江古田校舎大ホール入り口

<京都会場>

日程：11月27日(金)・28日(土)・29日(日)  
 会場：Lumen Gallery

例年「京都メディアアート週間」のプログラムとして実施してきましたが、今回は、<KINO-VISION 2015>のイベント名で実施し、ICAF実行委員会+日本アニメーション学会&協会主催による「ICAF2015」の“各校選抜プログラム”と“ICAF セレクション集”、そして「ISMIE2015」の“各校代表作品プログラム”および由良泰人会員（大阪成蹊大学芸術学部）企画による「Video Party セレクト集」と伊奈新祐会員（京都精華大学芸術学部）企画による「KINO-VISION セレクト集」を上映しました。詳しい上映作品については、以下のホームページを参照して下さい。  
 < <http://www.kyoto-seika.ac.jp/kino/2015/index.html> >

「ICAF2015」と「ISMIE2015」の選抜作品に加えて、KINO-VISION 独自のプログラムである“Video Party セレクト集”には、11月27日に大阪で発表・表彰式が行われた全国の美術系・デザイン情報系の専門学校・短大・大学・大学院の教員推薦による学生映像作品のコンペである「ISCA2015」（旧「BACA-JA」、現在、ナレッジキャピタルが主催）の最優秀作品に選ばれた『微熱』（2014、南條沙歩：京都市立芸術大学大学院）が含まれているなど、日本の学生映像作品の優秀作品をまとめて見ることができる良い機会であったと思います。「ISMIE2015“各校代表作品プログラム”」上映後には、参加校の推薦教員である3会員（由良、櫻井（成安造形大）、伊奈）によりミニトークを実施しました。出品学生の紹介後、それぞれの大学の制作状況など意見交換を行いました。

今回、3日間で約180名の参加者があり、会場の変更や連携プログラムを組むことにより、また映像表現研究会の会員作品（伊奈、由良、前田真二郎、米正万也）もプログラム（KINO-VISION セレクト集）に入れることで昨年より多くの入場者となりました。

<参考>：「KINO-VISION セレクト集」で上映した会員作品

- 「FUSO（風騷）」（7:00,1988）伊奈新祐
- 「VIDEO SWIMMER IN BLUE」（12:00,1993）前田真二郎
- 「case」（9:20,1994）由良泰人
- 「女拓（Nyotaku）」（6:00,1996）伊奈新祐
- 「believe in it」（3:20,1998）米正万也



「Video Party セレクト集+ KINO-VISION セレクト集」後のミニトーク風景  
 (スクリーン前、左から由良と伊奈)



「ISMIE2015“各校代表作品プログラム”」後のミニトーク風景  
 (スクリーン前、左から由良・櫻井・伊奈)

上記のほかにも ISMIE2014 セレクト集は、以下の会場でも上映されました。

<ショートフィルム研究会主催「名古屋フィルムミーティング2015」>

日程：10月4日(日) Sプログラム  
 14：40～（ISMIE2014 セレクト作品集）  
 会場：愛知芸術文化センター 12階・アートスペース EF

<西部支部>

日程：10月24日(土)  
 会場：九州大学大橋キャンパス(日本デザイン学会第5支部研究発表会)

また、ISMIE2015の今後の予定としては、北海道教育大学の伊藤隆介会員が中心となって、以下の日程で上映が予定されています。

<北海道会場>

日程：2016年2月20日(土)  
 13:00～14:30、15:00～16:30（代表作品の2プログラム）  
 会場：北海道教育大学岩見沢校 地域文化活動棟シアタールーム

以上

(いな しんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)  
 (おくのくにとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

# 日本における無声映画期のプログラム——その映画史研究的意義について

成田 雄太

明治期から第二次大戦中までに日本全国の映画館で配布されていた番組表、それがプログラムである。現在のようなシネマコンプレックス形態が主流になる遥か以前、映画館は様々に趣向を凝らしたプログラムを独自に編集、発行していた。本発表は、流通や体系化の困難などの理由から新聞、雑誌等に比べて活用されることがそれほど多くないプログラムの映画史研究的意義を明らかにすることを目的とするものであった。

プログラムはまず、映画を興行物として捉え研究することを可能にするものである。そのことを示すために前半では、作品＝製作物の連なりとして映画史を読むという視点からは見えてこない映画文化の側面を、実際にプログラムを見ていくことによって浮かび上がらせた。例えば何の作品がどのような順番で公開されたかという番組編成の記録からは、作品が単体としてではなく一つの興行の中で各々機能していたことを読み取ることができ、また、人気の映画説明者を集めた「獅子吼大会」や喜劇短篇作品の特集上映「ニコニコ大会」のプログラムからは、戦前における映画の流行の多くがその興行形態と強く結びついていた様子を窺うことができる。

さらに、異なる映画館のプログラムを並列させることによって見えてくるものもあった。上映作品の住み分けや、紙質やページ数などから読み取れる一流館と二、三流館などの区別は、直線的な年代記型の映画史とは別の複数の歴史を示唆するものであり、それは同時に、映画観客が決して均質な存在ではなく、多様な層に向かって開かれていたことを物語るものでもあった。

プログラムを検討することは、必然的に映画の受容の側面を検討することに繋がる。発表の後半では、観客がどのようにそれを受け入れていたかを見ていくことによって、プログラムが映画文化の形成にも積極的な役割を果たしていたことを明らかにした。

発表の中で特に重要視したのは、多くの映画館のプログラムに設けられていた投書欄の存在である。観客が映画についての思考を巡らし、意見を交換する場として機能することによって、プログラムは主体的な存在としての観客のあり方を、雑誌や新聞などの流通メディアよりも身近なレベルで各地に定着させる役割を果たしていたと言えるだろう。

さらにプログラムは、それ自身が全国の映画ファンの間でやり取りされることで、ファン文化の醸成にも大きく貢献した。発表では映画雑誌のプログラム交換希望のページを取りあげ、プログラムが全国の映画ファンを繋ぐコミュニティを形成する媒介物となっていたという指摘を行った。

プログラムは、特定の作品を論じるだけでは見えてこない映画の興行物としての側面を浮かび上がらせる媒体であり、また、観客が映画に積極的に関わる契機を生み出し、文化を駆動する場でもあった。以上の議論から本発表では、プログラムを映画文化の定着をより立体的に示し得るものであると暫定的に結論づけた。

(なりた ゆうた/山形大学人文学部附属映像文化研究所員、  
東北大学非常勤講師)

# 記憶と記録の狭間にて——3年目に入った東京北区「映画アーカイブによる街おこし」

高橋 克三

「みんなで記憶を共有すればいいんですよ。(略)」「そのとおりだね。だが、そうなるとするのが人が重荷を背負い、痛みをさいなまれることになる。かれらはそれを望まないのだ」

ロイ・ローリー「ギヴン 記憶を往く者」訳 島津やよい

記憶の忘却を防ぐために発明されたのが記録。しかし、その後の技術的発展は、いつしか記録が記憶を凌駕するようになった。市民の撮った8ミリフィルムのアーカイブ活動は、常にこの記憶と記録の間を揺れ動くことになる。どちらに寄っても成立しにくいのだ。われわれのモチベーションをどこに置くかも問われる2年間だった。

言うまでもなく8ミリフィルムは記録メディア。でもそこに映るのは、とても極私的な思い出の世界。その一コマが、フィルム提供者の生身の記憶と深く関わる映像である。

## 1.3つの立場

東京北区「映画アーカイブによる街おこし」(失われる寸前となっている北区の昔の景色や暮らしを伝える貴重な映像をアーカイブとして残し、公開することで街の記憶を共有し、コミュニティの形成や街おこしにつなげる)には、われわれを除くと、3つの立場の人たちが活動に関わっている。

- ①一つは、8フィルムや16ミリのフィルムの提供者。
- ②二つは、この事業を公的資金で助成する行政と主官になる図書館や博物館の担当者。地域史料の発掘と公開の一環として一緒に動く。
- ③三つは、北区民。発掘した映像の上映会への参加や図書館での映像ライブラリーの利用を呼びかける対象者。区の税金を使う以上、この事業に対する区民の理解と支持が、最終的には求められる。

そこで、発掘された映像に対する姿勢も三者三様になる。

①フィルム提供者。  
無料でテレビネサービスを行う映像の条件は、30年以上前の北区の風景や暮らしが、ほんの数秒でも映っていればよいので、提供してくれる映像の大半の部分は、子どもの誕生と成長や家族の年間の行事などの極私的な映像になる。そのため他人には分からない本人だけが大切にしている部分も多く、一般に公開できる部分の承認には、一コマずつ本人を確認しながら行う、まさに提供者の記憶と深く関わっていく作業になる。

②行政。  
地域史料として、発掘した映像のできるだけたくさんを、いつどこで誰がなどを提供者や関係者に確認した上で整理しライブラリー化していく必要がある。まさに記録を残す作業。

③区民。  
上映会や図書館の映像ライブラリーの貸し出しで面白く観てもらい、この事業への理解と支持を広げるため、地域の今昔を分かりやすく見せたり、昔の時代へのノスタルジーを喚起したりする映像が必要である。発掘した映像(図書館や博物館などにある写真史料、関係者へのインタビューや現在の姿などの映像を撮影し編集して一本の作品を制作することになる)。

## 2.それぞれの立場にも課題が

①フィルム提供者。  
著作権の譲渡などの契約書を書くことになるが、生身の記憶に絡んでくるので、そんな紙切れ一枚で解決するはずもなく、映像公開まで何回も公開できる部分を確認したり、背景のお話を聞いたりとプライベートな部分にかなり深く入った手間のかかる作業になる。また、その過程で知り得た個人情報の保護など倫理規定も必須になってくる。

②行政。  
市民の映像を映像史料としてその内容の項目を整理しインデックスをつける方法がまだ日本では確立して、どこまで調査して記載しておくか度合いが分からない。そこで詳細な聞き取りを前提にしようとおすと整理できる映像史料が少量になってしまい、劣化が心配されるフィルムを一本でも救出するために始めた目的と矛盾することになる。

③区民。  
発掘した映像を誰にでも面白く観やすく集めるためにノスタルジーなど典型的な表現を使うことになると、それは一方で、生き生きとした原初的な体験を封鎖する危険をはらむ。上映会で観客に映像が映るフィルムを手にとってもらうことや、提供者に会場で証言してもらうなどの仕掛けを常に意識して行わないと、われわれの活動自体が、消費社会のシステムの一部として組み込まれてしまうことになる。  
開田山積。だが、市民の映像アーカイブ活動は、確かに、現実と関わる回路であることは間違いないようだ。

## 3.パワーポイントで発表当日に公開した2年間の活動成果

- (1) 区民から寄せられたフィルムは318本。
- (2) 上映会参加応募者 1300名。参加者 1000名。
- (3) 上映会を95%が好評評価 大いに楽しんだ67% まあまあ楽しめた28%

## 4.集まった映像を上映し、3つの立場からの課題を説明

①—(1) 8ミリフィルムや16ミリのフィルムの提供者  
無料テレビネサービスを行う映像の条件は、30年以上前の北区の風景や暮らしが、ほんの数秒でも映っていればよいので、提供してくれる映像の大半の部分は、子どもの誕生と成長や家族の年間の行事などの極私的な映像になる。そのため他人には分からない本人だけが大切にしている部分も多く、一般に公開できる部分の承認には、一コマずつ本人を確認しながら行う、まさに提供者の記憶と深く関わっていく作業になる。

①—(2) 著作権・二次使用・個人情報保護  
フィルム提供者と著作権者の譲渡などの契約書を書くことになるが、生身の記憶に絡んでくるので、そんな紙切れ一枚で解決するはずもなく、映像公開まで何回も公開できる部分を確認したり、背景のお話を聞いたりとプライベートな部分にかなり深く入りお聞きするので、手間のかかる作業になる。また、その過程で知り得た個人情報の保護など倫理規定も必須になってくる。

上映した映像 1956年(昭和31年)の北区の商店街では、提供者の関係者のアップをすべて削ることを要求された。そのため、提供者の関係者は後ろ姿遠景まで登場せず、提供していただいたフィルムのほとんどが使えない結果となった。

②—(1) 区行政と図書館・博物館  
この事業を公的資金で助成する行政と主官になる図書館や博物館の担当者。地域史料の発掘と公開の一環として一緒に動く以上、この事業に対して、発掘した映像を、いつどこで誰がなどを提供者や関係者に確認した上で整理しライブラリー化していく必要がある。まさに記録を残す作業になる。しかし、こんな問題も起こる。

②—(2) 記録 (1932 1931 1932)  
昔王子区に十条でお医者さんを開業していた松井正雄さんのお孫さんから提供されたフィルム。豊島園遊園地で遊ぶ松井さんのご家族や、1932年に王子区ができたときに区議員松井さんが立候補した選挙風景の映像。1931年(昭和6年)宮下蔵さんの作ったアニメ「サルカニ合戦」など。すべて貴重なフィルムであったが、「映画アーカイブによる街おこし」の予算は、北区の風景が映っていることが条件なので、豊島園と「サルカニ合戦」は、対象外になってしまった。

②—(3) ネットワークと映像史料の共通のタグの必要性  
地域で映像アーカイブ活動を行うと必ずこういった対象外の貴重なフィルムを発掘することになる。全国で映像アーカイブを行っている団体のネットワークや、映像史料の共通のタグがあれば、この貴重なフィルムの情報を全国に発信して、救うことができる。

だが、市民の映像を史料としてその内容の項目を整理しインデックスをつける共通の方法がまだ日本では確立していない。どこまで調査して記載しておくか度合いが分からない。そこで詳細な聞き取りを前提にしようとおすと整理できる映像史料が少量になってしまい、劣化が心配されるフィルムを一本でも救出するために始めた目的と矛盾することになる。

③—(1) 税金を使う以上、区民の理解と支持は重要  
北区民は、発掘した映像の上映会への参加や図書館での映像ライブラリーの利用を呼びかける対象者になる。区の税金を使う以上、この事業に対する区民の理解と支持が、最終的には求められる。上映会や図書館の映像ライブラリーの貸し出しで面白く観てもらい、この事業への理解と支持を広げるため、地域の今昔を分かりやすく見せたり、昔の時代へのノスタルジーを喚起したりする映像が必要になってくる。

③—(2) 編集 (1962 1960)  
1962年(昭和37年)の北区滝野川と1960年(昭和35年)に北区王子で撮られた映像を上映。都内でも有名な商店街や工場街であるが、両方とも現在ではその痕跡はほとんどない。様変わりしてしまったのである。そこで、分かりやすくするため、上映会では、今の風景を撮影してきてインサートすることになる。

また、提供してくれるフィルムの多くは、結婚式、七五三、運動会、お祭りが写っていることが多い。家族を主役に撮られたこれらのフィルムは、同じ場面の繰り返しや、すべての過程を記録していて、どうしても他人が見ると冗長である。そのため、面白く見せるために、編集で、短く切ってしまった。興味深い場面だけをつなぐことになる。

③—(3) 史料性<作品性  
編集は、現在の視点で行うため、史料性というより、作品性というよりも強く出るものになる。このことがよいことかどうか、本当は、冷静かつ専門的な判断が必要だが、いろいろなパターンで保存できるだけの余裕や力量のある団体は少ない。この編集行為をどう考えるかもとても大きな問題である。

以上、「映画アーカイブによる街おこし」の現状の課題を整理した。  
(たかはしかつぞろ/街づくり・フロンティア21、株式会社ワトソンス)

## 高等教育における映像専門教育の指導方法の考察

植田 寛

### 1. 現状の映像専門教育

現在、多くの大学、専門学校において正規授業で映像制作・映像実習を実施している。またその学習目的も意図も様々で多岐にわたり、本研究も現段階では中間発表的な内容にとどまった。

### 2. 高等教育での映像教育目的

これまで高等教育での映像の取り組みはアカデミックなアプローチが多く見受けられた。近年になり、さまざまな変化が見受けられ、一部の大学では専門学校化などと言われ、就職を主眼に舵を切った大学も存在するようである。その中で確立した教育方法を存在しえるのかを考察したい。

### 3. 実習方法の分類

問題を実技的な授業に的を絞って考えてみる。決して単純に分類できるわけではなく、複合的な授業を展開しているケースも見られるが、多くは下記の3つケースが存在する。

- ①見習い式(系統学習方式)
- ②シミュレーション式(問題解決学習方式)
- ③粘土細工式(水道学習方式)

### 4. 各実習方法

#### 4.1. 見習い式(系統学習方式)

高校まで取られてきた一般的な教員から学生への一方的な教育方法である。学生も同方式に慣れており、マス授業に適している。特に専門学校に強い短い教育期間に合致する。

#### 4.2. シミュレーション式(問題解決学習方式)

教育の場でプロの現場に近い環境を作り出し、その中で実際に学んでいく方法である。即戦力の人材を輩出しやすいと考えられる。

#### 4.3. 粘土細工式(水道学習方式)

特に役割を決めず、皆で「楽しんで作る」事を中心に学生の「作りたい」というモチベーション高め、自ら積極的に制作の中で様々な知識・技術を学んでいく方法である。

### 5. 各実習方法で生じている問題点

#### 5.1 見習い式(系統学習)

学習主体が個人であり且つ受け身となるので、協力作業及びコミュニケーション能力の習得に乏しい事が挙げられる。また系統学習の軸になるそもその系統が存在しえるのか疑問の残るところである。

#### 5.2 シミュレーション式(問題解決学習方式)

協力して制作する意識が育まれるはずだが、セクショナリズム陥り、映像を制作するという目的を見失う者も存在する。また指導者のプライドが教育効果よりも優先されるケースも見受けられる。

#### 5.3 粘土細工式(水道学習方式)

様々な知識・技術を自ら貪欲に学び取る事もあるが、時に映像制作に興味は持つものの、プロの現場に結びつかない者もいる。また指導者の経験等により学生の知識・技術習得に大きく影響する事もある。

### 6. 粘土細工式の可能性

本校本学科においては粘土細工式の授業を中心に展開しており、毎週、授業内で学んだ内容をテーマにした簡単な制作を課しており、そこに学生の興味を持って臨める工夫を行っている。現在のところ概ね、学生は興味を持ち良好に進行していると考えられる。

また、映像制作の過程で andragogy が行われやすい状況が特徴的にあると考えられる。

### 7. 映像制作教育方法の方向性

本研究は、未だ結論は見えないが、筆者のディレクター経験からも、現場と学校で教えるべき内容の線引きが非常に困難である事も、この問題を考える上で一つのネックになっている。加えて授業の効果を正確に評価する方法も模索しており、その確立も重要だと考えている。

また発表後 PBL (Project-Based Learning) も考えては? というご意見をいただいたが、現状では PBL に至るに達していないと考えるが、今後の考慮点の一つである。

(うえだ かん/尚美ミュージックカレッジ専門学校音響・映像学科)

## 1930年代におけるアマチュア映画文化と色彩——コダカラーの研究活用とアーカイビング

板倉 史明・松尾 好洋

近年の映画研究やアーカイブ研究において、過去に撮影されたアマチュア映像が芸術的・歴史資料的な観点から注目されている。本発表では、1920年代末から1930年代中期にかけてアメリカで製造され、日本にもほぼ同時期に輸入されたフィルムである「コダカラー」について、それを生かした当時のアマチュア映像の学術的な価値を、近年の関連する先行研究を踏まえながら検討する(フィルム所蔵:神戸映画資料館)。コダカラーは特殊な処理(レンチキュラー)が施された白黒フィルムであるが、撮影時と映写時に専用のフィルターをレンズの前に装着することによってカラー映像となる。本発表では、デジタル技術と写真化学的な技術を組み合わせることによって実現する、コダカラーの最適な色彩再現法もあわせて提案する。

コダカラーはイーストマン・コダック社が1928年に発売を開始したカラー映像を記録するためのフィルムである。画像を形成する乳剤面は白黒フィルムと同様であるが、ベース表面に微細な溝(レンチキュラー)が施されているため、撮影時と映写時に特殊なフィルターを使用することでカラー映像が得られた。今回、神戸映画資料館で発見されたコダカラーフィルムは、製造から既に80年以上が経っており、極度に劣化が進行したものは復元さえ行うことができなかった。そこで、コダカラーを再生するための写真化学的な技術と、今日のデジタル技術を融合することによってカラー映像として復元する機器の開発を試み、実用化に成功した(図1)。その結果、コダカラーに記録された当時のカラー映像を再現し、デジタルに変換することで長期的に保存し、活用することが可能になった。

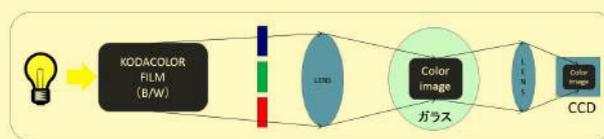


図1 テレシネ機の内部構造

発表の後半では、近年におけるアマチュア映像研究の成果を踏まえて、デジタル復元されたコダカラー映像を研究活用する可能性を検討する。1930年代の日本における映像のほとんどはモノクロであったため、当時の被写体が何色であったのかを調査することは非常に難しい。したがってコダカラーに記録された当時のカラー映像から、当時の日常生活にあふれていた色彩を確認することが可能となり、それは時代考証の資料としても活用が可能となる。またアマチュア映画作家がコダカラーを使ってどのような被写体を選択して撮影したのか、という制作者・撮影者の視点からの分析も可能であろう。

(いたくら ふみあき/神戸大学大学院国際文化学研究所、  
まつお よしひろ/株式会社 IMAGICA ウェスト)

## 加藤泰『みな殺しの霊歌』論 —— 大和屋竺と斎藤龍鳳の論 争を手がかりとして

井川重乃

本発表は加藤泰『みな殺しの霊歌』（1968）について雑誌「映画芸術」誌上にて大和屋竺と斎藤龍鳳の間で起こった論争を出発点として本作の再検討を行った。両者のなかで問題となったのは本作における「代理報復」とは何か、そしてその「リアリティ」の妥当性であった。大和屋竺にとって「代理報復」とは、監督作品『荒野のダッチワイフ』（1967）、鈴木清順未映画化脚本『鑄剣』をはじめとして一貫して描いているテーマであり、彼が「代理報復」と「革命」とを結びつけていることは先行研究（平岡正明『若松プロ、夜の三銃士』〔愛育社、2008年〕など）で論じられている。また当時の映画雑誌を概観すると「リアリズム」「リアリティ」の語の再検討が行われている。そこではリアリティが「社会主義リアリズム」に回収されてしまうことを危惧した指摘や、風俗的な技巧で作るあげる「メロドラマ」のみが映画的なリアリズムだとする風潮に警鐘を鳴らしていた（『キネマ旬報』（一九六八年、四月下旬号、NO465）佐藤忠男や新藤兼人の論考など）。

再考にあたっては先行研究や当時の社会的背景を踏まえ『みな殺しの霊歌』の作品分析を行った。発表では斎藤龍鳳のいう「リアリティのなさ」を「代理報復」の妥当性として検討した。登場人物の人間関係が「代理報復」の妥当性を裏付けなくてはならないが、映画内では人の死が要因となって無関係の人間同士をつなげてゆくように見え、実のところ人の死は一切の関連性は生まない。「代理報復」とは佐藤允が集団強姦事件や自らが起こした殺人事件を「関係」させるために作り上げたフィクションであることがわかる。「因果性」なき関係、それが「代理報復」であった。また佐藤允がその因果なき関係性の「代理報復」を決意するシークエンスで、少年や主人公のような労働者を仰角のカメラは見上げるようなアングルでとらえる。そこに大和屋竺は「少年の死と同時に、労務者の情意が正しく殺意の方へと向かったのは、彼の眼を射たそのゴムの滑りどめのギザギザが、河原温描くところの浮遊人間の足底にほかならず、浮遊をやめ、鉄骨から、なめたいほどに美しいアスファルトの舗道へ着地を試みる者は血にまみれざるを得ないということ、まざまざと見たからにはほかならないのだ」（『日本読書新聞』一九六八年四月二十九日号）と論じ、下から上へというカメラの運動に共鳴したことがわかる。

以上のことから本作品で「代理報復」の「リアリティ」とは関係性の希薄さであり、人間の関係に妥当性がないことこそリアルだという結論が導かれた。因果性なき事象の断片が構築された世界の革命として大和屋竺が評価したことが加藤泰『みな殺しの霊歌』に描かれている「代理報復」のダイナミズムである。発表では、製作に加わった山田洋次について指摘をいただいたこともあり、今後はさらに視座を広げて、加藤泰の映画のみならず周辺の製作者や大和屋竺の監督作品なども含めて多角的に考察していきたい。

(いかわ しげの/北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

## 『POP 70』——白黒ハイコントラストフィルムによる映画制作

大島 慶太郎



本作品は、白黒ハイコントラストの銀塩フィルムにおけるイメージの可視化及び、オプチカルサウンドトラックの手作業による制作についての実験映画作品である。

作品制作を通じて、白黒ハイコントラストフィルムの特性を見出し、映画制作の行程に造形表現的なアプローチを用いることでカメラレスの表現についての技法研究と考察を行った。

白黒ハイコントラストフィルムは、階調が少なく低感度という特徴がある。本作品では、一般的な映画制作において、タイトル制作や合成用のマスク制作などに用いられているタイプのフィルム（Kodak7363、5363）を使用した。

ハイコントラストフィルムを用いたイメージメイキングの特徴として、実像の2階調化により記号性の強い像を作り出すことができる。また低感度であることから、安全光下の暗室にて卓上での手作業による精密な露光が可能となる。本作ではメインビジュアルとしてポップコーンを用いている。発表では被写体となるポップコーンそのものを卓上作業によりフィルムへ定着させる方法やサウンドトラックの手作業による制作方法について、制作プロセスを記録した写真やサンプル映像を使用しながら解説した。また作品はオリジナルフォーマットの16mmフィルムで上映した。

発表は、オリジナルフォーマットがフィルムの作品をまとめた会場にて上映及び作品解説という形式で行なわれた。上映中に私のフィルムが途中で切れてしまったのだが、会場内の聴講者の皆さんが、それ自体もフィルム上映の特徴であるとポジティブに捉えられていたことが非常に印象的であった。

(おおしま けいたろう/北海道情報大学情報メディア学部)

# 日本映像学会第42回大会 第2通信

大会実行委員会

## I. 大会概要

- =====
- 大会テーマ:映像教育の可能性について～創作と研究の二面から(仮)
  - 会場:日本映画大学 [白山キャンパス]
  - 会期:2016年5月28日 [土]・29日 [日]
  - プログラム(予定)
    - 第1日:5月28日 [土] 13:00～20:00  
シンポジウム(内容・登壇者未定)  
研究発表・作品発表  
懇親会
    - 第2日:5月29日 [日] 10:00～18:00  
研究発表・作品発表  
理事会・第43回通常総会
  - 大会参加費(2日間通し)
    - 会員 3,000円 一般 2,000円 学生 1,000円
    - 懇親会 5,000円(予定)
- ※プログラムの詳細は、大会ホームページおよび「第3通信」(5月初旬)にてお知らせいたします。

## II. 大会研究発表・作品発表申込要領

- =====
- 各発表の申込資格は、2015年度在籍会員に限らせていただきます。
  - 各発表は学会の趣旨にそぐわない場合、あるいは技術的な理由などで対応しかねる場合にはお断りすることがあります。
  - 各発表は日本映像学会理事会(2016年3月末開催予定)において承認の上、大会実行委員会として正式に受理致します。
  - 発表を希望される方は、所定の申込書を郵送・FAX・メールのいずれかで日本映像学会第42回大会実行委員会までお送りください。
  - 必要事項に不備のある場合や申込資格のない場合は無効となります。
  - 各発表の申込期日は、理事会開催の都合上、2016年2月26日(金)必着といたします。
  - 理事会承認後に正式受理の可否についてご連絡致します。
  - 正式受理の場合、発表概要原稿(2000字、MS-Wordファイル)を2016年4月22日(金)までにご提出ください。正式受理者には発表概要書式をお送りします。

## III. 大会への出欠はがきの送付

[1月発送予定のペーパー版第2通信に同封]

=====

参加のみの出席なのか、研究・作品発表もおこなうのか、1月発送予定のペーパー版第2通信に同封のはがきに必要事項を記入し、切手を貼らずに投函してください。

必着日厳守をお願い致します。

## IV. 大会研究発表・作品発表申込方法

- =====
- 1月発送予定のペーパー版第2通信に同封の申込用紙に手書きで記入し郵送する場合の送り先(封筒・郵送料はご自身でご負担願います。)
    - 〒215-0014  
神奈川県川崎市麻生区白山2-1-1 日本映画大学  
日本映像学会第42回大会実行委員会

# 編集後記

総務委員会

■会員の皆様、あけましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸をお祈りしております。さて早いもので、昨年の新年号の編集担当をさせていただき、今回も2016年の新年号となる173号の編集を担当しておりますが、あつという間の一年でした。研究会のあり方、ホームページのリニューアル、予算の件など、学会ができるだけ会員をサポートできるような体制、および、昨今の状況に合わせようとした一年でした。まだまだ足りない部分もありますが、昨年の一年で少しは進歩したと思っております。今後とも、よろしく願いいたします。■第42回大会は、5月28日(土)、29日(日)の2日間、日本映画大学での開催となります。3年ぶりに関東で行われます。会員の皆様の多くの参加をお待ちしております。(鳥山)

②1月発送予定のペーパー版第2通信に同封の申込用紙をFAXで送る場合の送り先

FAX:044-988-7575(大会実行委員長:石坂健治 宛)

③申込用紙を大会HPからダウンロードし、メール添付で送る場合

大会HP: <http://jasias.jp/2016main>大会実行委員会メールアドレス: [jasias2016@eiga.ac.jp](mailto:jasias2016@eiga.ac.jp)

※1週間以内に受領のメールを差し上げます。受領の連絡がない場合は電話にてお問い合わせください。

TEL:044-328-9123(大会実行委員会)

④直接メールで送る場合は、申込用紙の項目に従って必要事項を記入し、大会実行委員会メールアドレスにお送りください。

申込締切 2月26日 [金] 必着厳守

## V. 発表時間・使用機材

=====

- [発表時間]:研究発表・作品発表の発表時間は25分、質疑応答を5分とします。

- [使用機材]:研究発表・作品発表には、DVD、ブルーレイ、VHS、OHPなどが使用可能です。ご持参されるパソコンを接続するVGA接続端子は教卓に設置されていますが、接続用アダプタは発表者ご自身でご用意ください。またフィルム(8mm、16mm)やDVテープの上映に関する事など、詳細はメールにてご相談ください。

日本映像学会第42回大会実行委員会

顧問 佐藤忠男(日本映画大学学長)

実行委員長 石坂健治(日本映画大学映画学科長・教授)

委員 高橋世織(日本映画大学映画学科教授)

安岡卓治(日本映画大学映画学科教授)

伊津野知多(日本映画大学映画学科准教授)

土田環(日本映画大学映画学科准教授)

藤田純一(日本映画大学講師)

川崎賢子(日本映画大学映画学科教授)

田辺秋守(日本映画大学映画学科准教授)

実行委員会事務局

〒215-0014 神奈川県川崎市麻生区白山2-1-1

日本映画大学 白山キャンパス内

日本映像学会第42回大会実行委員会

[TEL] 044-328-9123 [FAX] 044-988-7575

[E-MAIL] [jasias2016@eiga.ac.jp](mailto:jasias2016@eiga.ac.jp)[大会HP] <http://jasias.jp/2016main>

以上